水谷遺跡　第10次調査
馬掛原遺跡　第１次調査

― 都市計画道路出合新方線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２ ―

2005

神戸市教育委員会

水谷遺跡　第10次調査
馬掛原遺跡　第１次調査

— 都市計画道路出合新方線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２ —

2005

神戸市教育委員会

序

平成７年１月17日に発生し、兵庫県南東部に甚大な人的・物的被害を与えた阪神・淡路大震災から10年の歳月が経過しました。その間、一日でも早く、市民の方々に元の生活に戻っていただくために、市を挙げての復興事業、それに伴う広範囲な埋蔵文化財調査の実施に、各都道府県・政令指定都市文化財担当職員の支援を得て、全力を傾けてまいりました。

この間、多くの市民の方々をはじめ、全国から寄せられた人々の協力と支援をいただき、ようやく、震災の復興事業は終わりに近づこうとしています。

本書掲載の遺跡が所在する神戸市西区は、震災では震源地の対岸に位置しながらも、壊滅的な打撃は免れました。都市計画道路出合新方線は、その一画を縦断する重要な道路です。当該道路建設事業では、平成15年に『今池尻遺跡 新方遺跡平松地点埋蔵文化財発掘調査報告書』が刊行されており、当報告書はそれに続くものです。

今回の調査では、弥生時代の墳墓や古墳時代後期の円墳、方墳などが発見されました。この報告が、西区の歴史を明らかにする一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました方々、関係各機関に厚く御礼申し上げます。

平成17年３月

神戸市教育委員会

教育長　小川　雄三

例　　言

1．本書は、都市計画道路出合新方線の築造に伴い、神戸市都市整備公社より委託され、神戸市教育委員会、㈶神戸市体育協会が平成15年度に実施した、水谷（みたに）遺跡第10次、馬掛原（うまかけはら）遺跡第１次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

当該事業では、平成15年に『今池尻遺跡・新方遺跡平松地点埋蔵文化財発掘調査報告書』がすでに刊行されており、当報告書はそれに続くものであるため、都市計画道路出合新方線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２とする。

2．本報告の発掘調査地点は、神戸市西区水谷１丁目（水谷遺跡第10次調査）および、神戸市西区玉津町高津橋（馬掛原遺跡第１次調査）に所在する。

3．各調査の担当者氏名、調査期間、調査面積等は第１章第４節に記載した。

4．神戸市では、平成12年度に調査次数の整理・改訂作業を行っている。そのため本書掲載の次数と当教育委員会発行の神戸市埋蔵文化財年報に記載された次数とは異なるものがある。以上から、これまでの調査に関する遺物・写真等の照会については、当教育委員会文化財課に問い合わせていただきたい。

5．本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究部編集（神戸市体育協会発行）の50,000分の１神戸市全図を、詳細位置図は神戸市発行2,500分の１の地形図「二ッ屋」を使用した。

6．本書に用いた方位・座標は平面直角座標系第Ｖ系（世界測地系）で、当遺跡付近では真北から23′、磁北から７°13′東に振る。標高は東京湾中等潮位（Ｔ．Ｐ．）で表示した。

7．本書の執筆は、第１，２，４章は谷　正俊、第３章は藤井太郎が担当し、編集は谷が行った。

8．遺構写真は各担当者が撮影した。遺物写真については、独立行政法人　奈良文化財研究所　牛嶋　茂氏の指導を得て、杉本和樹氏（西大寺フォト）が撮影した。

9．出土遺物については、兵庫県教育委員会　山田清朝、篠宮正氏にご教示いただいた。

本文目次

序
例　言
第１章　はじめに
第１節　遺跡の立地と歴史的環境 …… 1
第２節　既往の調査概要 …… 7
第３節　調査にいたる経緯 …… 8
第４節　調査の実施状況 …… 9
第５節　調査体制 …… 9
第６節　調査日誌抄 …… 10
第２章　水谷遺跡第10次調査
第１節　調査の方法 …… 11
第２節　調査成果 …… 12
第３節　小結 …… 24
第３章　馬掛原遺跡第１次調査
第１節　調査の方法 …… 25
第２節　調査成果 …… 26
第３節　小結 …… 32
第４章　まとめ
第１節　明石川流域における古墳時代後期の古墳群について …… 33
第２節　終わりに …… 41

挿図・挿図写真目次

fig.1　水谷遺跡、馬掛原遺跡の位置…… 1
fig.2　明石川中・下流域の遺跡…… 2
fig.3　明石川中・下流域の遺跡一覧表…… 3
fig.4　調査地位置図…… 7
fig.5　水谷遺跡調査次数一覧表…… 8
fig.6　調査体制一覧表…… 9
fig.7　調査日誌抄……10
fig.8　調査区地区割図……11
fig.9　調査前の状況〈写真〉……11
fig.10　人力掘削作業〈写真〉……11
fig.11　調査区土層断面模式図……12
fig.12　調査区平面図……13
fig.13　３号墳周溝断面図……14
fig.14　３号墳周溝堆積土掘削作業〈写真〉……14
fig.15　３号墳周溝セクション〈写真〉……14
fig.16　３号墳平・立面図……15
fig.17　３号墳周溝内土器出土状況図……16
fig.18　３号墳周溝出土土器……17
fig.19　４号墳周溝断面図……18
fig.20　４号墳平・立面図……19
fig.21　４号墳周溝掘削作業〈写真〉……19
fig.22　４号墳周溝セクション〈写真〉……19
fig.23　４号墳周溝付近粘土塊・埴輪出土状況図……20
fig.24　４号墳周溝内土器出土状況図……20
fig.25　４号墳周溝出土土器……21
fig.26　４号墳上層（黄灰色粘質土）出土土器……21
fig.27　４号墳上層（黄灰色粘質土）出土石製紡錘車……21
fig.28　４、５号墳周溝、黄灰色粘質土出土埴輪……22
fig.29　５号墳平・立面図……23
fig.30　５号墳周溝断面図……24
fig.31　調査風景〈写真〉……25
fig.32　調査範囲図……25
fig.33　調査区全体図……26
fig.34　ＳＤ01平・断面図……27
fig.35　ＳＤ01出土遺物……27
fig.36　ＳＤ03・04出土遺物……28
fig.37　ＳＤ03～07平・断面図……29
fig.38　ＳＸ03・04　平・断面図……30
fig.39　ＳＸ03・04　土層断面（南から）〈写真〉……30
fig.40　ＳＸ04　遺物出土状況（東から）〈写真〉……30
fig.41　ＳＸ01　平・断面図……30
fig.42　ＳＸ02　平・断面図……30
fig.43　ＳＢ01　平・断面図……31
fig.44　ＳＢ01（南から）〈写真〉……31
fig.45　ＳＢ02　平・断面図……31
fig.46　ＳＢ02（南から）〈写真〉……31
fig.47　区画墓推定図……32
fig.48　水谷古墳群データ……33
fig.49　南山神古墳出土埴輪……33
fig.50　水谷古墳群集成図……34
fig.51　明石川流域の帆立貝形古墳一覧表……35
fig.52　明石川流域の後期前半の古墳と集落址一覧表……36
fig.53　明石川流域の後期前半の古墳と集落址……37
fig.54　住吉宮町古墳群全体図……40

写真図版目次

写真図版１
調査地遠景(北上空から)
調査地遠景(南東上空から)
写真図版２
Ａ区東半部全景(西から)
Ｃ区３、４号墳周溝完掘状況(西から)
写真図版３
Ｃ区全景(東から)
Ｃ区３号墳周溝完掘状況(南東から)
写真図版４
Ａ区３号墳周溝内土器出土状況(東から)
同上細部(南東から)
写真図版５
Ｃ区３、４号墳周溝内土器出土状況(東から)
Ｃ区４号墳周溝内土器出土状況細部(北から)
写真図版６
Ａ区４号墳周溝完掘状況(東から)
Ａ区４号墳周溝付近粘土塊・埴輪出土状況(東から)
写真図版７
Ｂ区全景(東から)
Ｂ区５号墳周溝完掘状況(東から)
写真図版８
３号墳周溝出土土器
写真図版９
３号墳周溝出土土器
４号墳上層(黄灰色粘質土)出土土器
４号墳周溝出土土器
写真図版10
４号墳上層(黄灰色粘質土)出土石製紡錘車
４、５号墳周溝、黄灰色粘質土出土埴輪
写真図版11
調査区全景(空撮・北から)
調査区全景(空撮・南西から)
写真図版12
Ａ区南半全景(北東から)
Ａ区中央全景(北東から)
Ａ区北半全景(南東から)
写真図版13
Ｂ区全景(東から)
ＳＸ03・04全景(南東から)
ＳＸ05全景(東から)
ＳＸ01(東から)
ＳＸ02(東から)
写真図版14
方形区画遺構　ＳＤ01～04全景(北から)
写真図版15
ＳＤ01全景(東から)
ＳＤ01遺物出土状況(東から)
ＳＤ01西辺遺物出土状況(南東から)
ＳＤ01北辺遺物出土状況近景(東から)
ＳＤ01北辺遺物出土状況(南から)
ＳＤ01西辺遺物出土状況近景(南東から)
写真図版16
ＳＤ03全景(南東から)
ＳＤ03土層断面(南東から)
ＳＤ03東端遺物出土状況(東から)
ＳＤ03西端遺物出土状況(南東から)
ＳＤ03出土遺物
写真図版17
ＳＤ04全景(北東から)
ＳＤ04土層断面(北東から)
ＳＤ04出土遺物

第１章　はじめに

第１節　遺跡の立地と歴史的環境

水谷遺跡、馬掛原遺跡は神戸市西区に所在する。当区は本市域西端に位置し、南は明石市、西は播磨町、北は三木市と境を接する。区内には、明石川とその支流である伊川、櫨谷川が流れ、明石市を経由して播磨灘にその水流を注ぎこむ。

明石川の中・下流域には小規模な沖積平野が拡がり、農地と住宅地が混在する状況を呈するが、農地は近年の区画整理事業や小規模開発で徐々に住宅地に造成されている。上流域は河岸段丘が発達し、典型的な都市近郊の農業地域である。また、中・上流域の丘陵部は、西神ニュータウンをはじめとする複数の大規模な開発によって、新しい街づくりが行われ、大きく変貌しつつある。

これらニュータウン等の開発により、区内の人口は24万人（平成16年10月現在）を超え、市内９区の内、最も多い人口を抱えている。また土地区画整理事業の進捗に伴い、今後もさらなる人口増加が予想される。

このように開発の進む西区の中にあって、水谷、馬掛原遺跡は、明石川の支流である櫨谷川と伊川に挟まれた標高30～50m程度の段丘の縁辺部に位置する。両遺跡は比高差約15m、幅約70m程度の谷を挟んで位置しており指呼の距離ではあるが、谷斜面が急峻であるため往来することは難しい。両遺跡周辺は区画整理事業によって、大規模な宅地化がなされており、急速に変化している。

明石川とその支流周辺には、先土器時代から中世にかけての遺跡が多く確認されており、それらの内、主要な遺跡は、fig.2のとおりである。

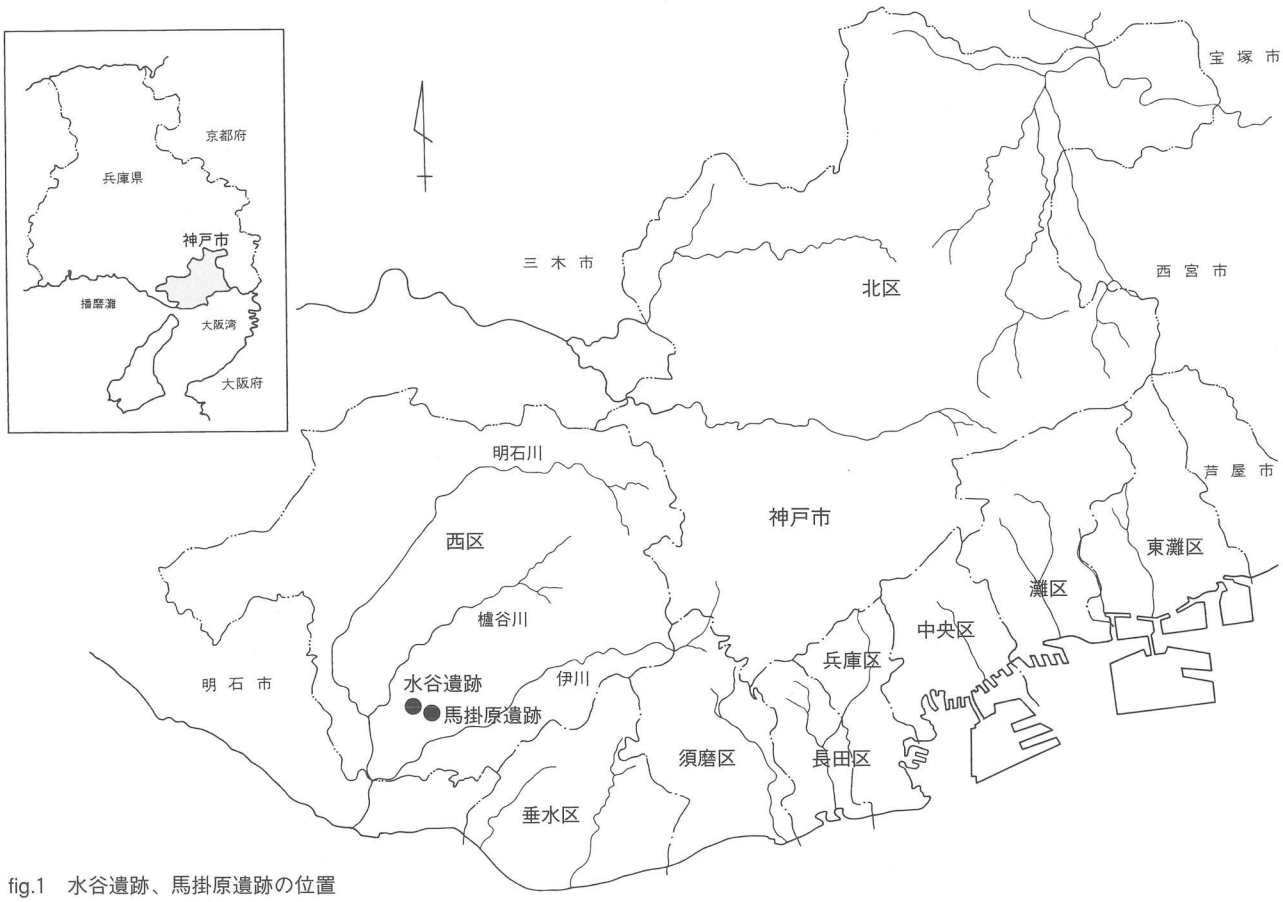


fig.1　水谷遺跡、馬掛原遺跡の位置

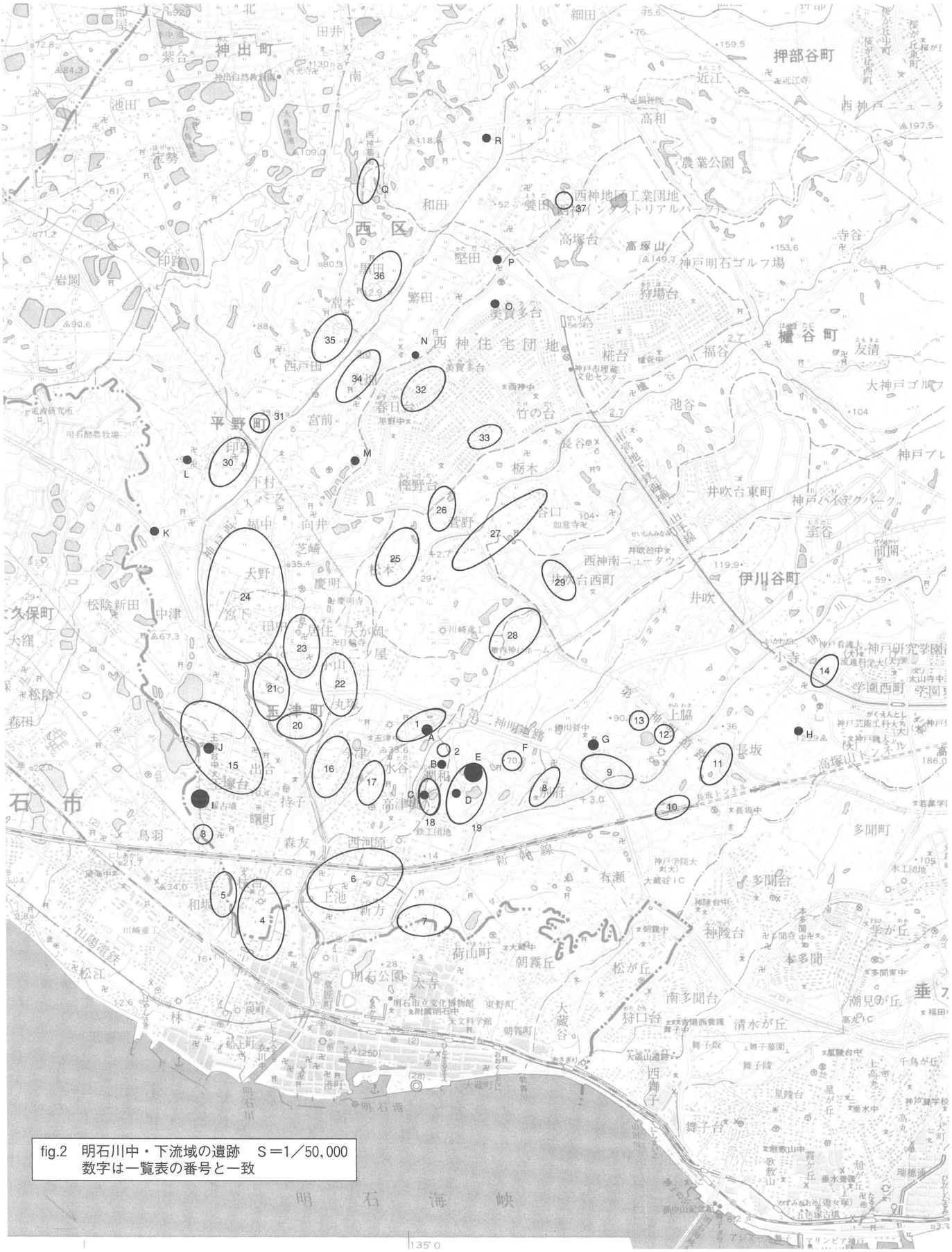


fig.2　明石川中・下流域の遺跡　S＝1／50,000
数字は一覧表の番号と一致

番号	遺跡名	時代	主な遺構・遺物・特徴
1	水谷遺跡	古墳時代	古墳時代後期初めの木棺直葬墳・平安時代の掘立柱建物
2	馬掛原遺跡	弥生時代	弥生時代中期の周溝墓、ピット
3	吉田遺跡	弥生時代	弥生時代前期初めの土器
4	吉田南遺跡	弥生～中世	弥生時代末～古墳時代の拠点的集落、奈良時代の官衙的遺構・遺物
5	片山遺跡	縄文～弥生	縄文時代後期の土器
6	新方遺跡	弥生～中世	弥生時代中期の拠点的集落、古墳時代の玉造工房
7	寒鳳遺跡	古墳～中世	古墳時代後期の大壁造建物、竪穴住居
8	北別府遺跡	弥生～中世	奈良・平安時代の溝、火葬墓
9	池上北遺跡	弥生～中世	弥生時代後期末の火災住居
10	池上口ノ池遺跡	弥生～古墳	弥生時代後期～古墳時代初頭の段丘上に立地する集落
11	長坂遺跡	古墳～中世	古墳時代前期の竪穴住居
12	上脇遺跡	弥生～中世	弥生時代後期～中世の竪穴住居、掘立柱建物、溝、井堰
13	表山遺跡	弥生時代	弥生時代中期の丘陵上の集落
14	頭高山遺跡	弥生～中世	弥生時代中期の丘陵上の集落、中世の山岳寺院
15	出合遺跡	旧石器～中世	古墳時代中期～後期の拠点的集落、韓式系土器
16	今津遺跡	弥生～古墳	弥生時代中期～古墳時代前期の集落、溝
17	高津橋岡遺跡	弥生～平安	弥生時代後期・古墳時代後期の竪穴住居、平安時代後期の掘立柱建物
18	高津橋大塚遺跡	弥生時代	弥生時代後期の竪穴住居
19	白水遺跡	平安時代	平安時代後期の梵鐘鋳造遺構
20	小山遺跡	弥生・中世	古墳時代後期～古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物
21	居住遺跡	弥生・中世	弥生時代前期の溝、中世の溝、建物群
22	二ッ屋遺跡	弥生～中世	平安時代末期の居館
23	居住・小山遺跡	弥生～中世	古墳時代後期の方形墳、鎌倉時代の掘立柱建物
24	玉津田中遺跡	弥生～近世	弥生時代中期～古墳時代前期の拠点的集落
25	菅野遺跡	弥生～古墳	古墳時代中期～平安時代の竪穴住居・掘立柱建物、溝
26	西神ニュータウン第62号遺跡	弥生～古墳	古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物
27	栃木遺跡	弥生～古墳	弥生時代中期～古墳時代後期の集落
28	青谷遺跡	旧石器～弥生	弥生時代の磨製石戈、青銅鏡
29	城ヶ谷遺跡	弥生～中世	弥生時代中期の丘陵上の集落
30	印路遺跡	縄文～中世	古墳時代前・中期の溝、韓式系土器
31	西戸田遺跡	弥生～中世	弥生時代後期の竪穴住居、鎌倉時代の集落
32	西神ニュータウン第50号遺跡	弥生時代	弥生時代中期の丘陵上の集落
33	西神ニュータウン第65号遺跡	弥生時代	弥生時代中期の丘陵上の集落
34	大畑遺跡	弥生～中世	古墳時代後期の大量の土器群
35	常本遺跡	弥生～古墳	弥生時代前期・後期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居
36	黒田遺跡	弥生～平安	古墳時代後期の竪穴住居、平安時代後期の掘立柱建物
37	養田中ノ池遺跡	弥生～平安	弥生時代中期の丘陵上の集落
A	水谷大東古墳	古墳時代	古墳時代後期の帆立貝形古墳、埴輪列、形象埴輪
B	延命寺古墳	古墳時代	古墳時代後期の古墳
C	高津橋大塚古墳	古墳時代	木棺直葬（礫敷粘土床）、捩文鏡、碧玉製管玉、石見形盾形埴輪
D	延命寺2号墳	古墳時代	径10mの円墳、墳丘は削平、周溝のみ残存、埴輪片
E	瓢塚古墳	古墳時代	全長57mの前方後円墳、粘土槨、画文帯神獣鏡、碧玉製石釧、車輪石
F	天王山古墳群	古墳時代	4号墳：古墳時代前期の長方形墳、八禽鏡、管玉、鉄製品
G	鬼神山古墳	古墳時代	径14mの円墳、礫床2基、変形五獣鏡、馬具、玉類
H	柿谷1号墳	古墳時代	径14mの円墳、埴輪列、形象埴輪、木棺直葬、鉄製品
I	王塚古墳	古墳時代	全長93mの前方後円墳、馬蹄形の周濠、埴輪
J	亀塚古墳	古墳時代	古墳時代後期の帆立貝形古墳、埴輪、削平のため埋葬施設不明
K	中村5号墳	古墳時代	古墳時代後期の帆立貝形古墳、木棺直葬、帯金具、鉄製品、埴輪
L	下大谷1号墳	古墳時代	古墳時代後期の円墳、木棺直葬、碧玉製管玉、ガラス玉，金属製勾玉
M	西神ニュータウン第55号墳	古墳時代	割竹形木棺、鉄製品
N	西神ニュータウン第44号墳	古墳時代	古墳時代前期の方墳、鉄製品、割竹形木棺
O	西神ニュータウン第30-1号墳	古墳時代	礫槨、鉄製品
P	堅田神社1号墳	古墳時代	古墳時代前期の方墳、割竹形木棺、碧玉製管玉、ガラス玉、鉄製品
Q	鍋谷池群集墳	古墳時代	2号墳：直径14.5mの円墳、木棺直葬、鉄製品
R	七曲り古墳群	古墳時代	6号墳：直径10mの円墳、木棺直葬、鉄製品

fig. 3 明石川中・下流域の遺跡一覧表

参考文献

1．水谷遺跡　①西岡巧次他「水谷遺跡」『平成３年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1994

②斎木巖他「水谷遺跡第４次調査」『平成７年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1998

③山本雅和他「水谷遺跡第５次調査」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1999

④西岡巧次他「水谷遺跡第7次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1994

2．馬掛原遺跡　①本書掲載

3．吉田遺跡　①直良信夫・小林行雄「播磨国吉田史前遺跡の研究」『考古学』第３・４号　1932

②「吉田遺跡」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

4．吉田南遺跡　①「吉田南遺跡」『地下に眠る神戸の歴史展』神戸市立考古館　1980

②「吉田南遺跡」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

5．片山遺跡　①「西区のその他の遺跡」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

6．新方遺跡　①丸山潔『新方遺跡発掘調査概要・居住遺跡発掘調査概要』神戸市教育委員会　1984

②丹治康明「新方遺跡(大日地点)」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1985

③山口英正他『新方遺跡　野手・西方地区発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2003

7．寒鳳遺跡　①藤井太郎「寒鳳遺跡第１次調査」『平成７年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1998

②黒田恭正他「寒鳳遺跡第２次調査」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1999

③西岡誠司「寒鳳遺跡第３次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2001

8．北別府遺跡　①「北別府遺跡」『地下に眠る神戸の歴史展』神戸市立考古館　1980

9．池上北遺跡　①菅本宏明「池上北遺跡」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1986

10．池上口ノ池遺跡　①「池上口ノ池遺跡」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

②安田滋「池上口ノ池遺跡」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1990

11．長坂遺跡　①丹治康明「長坂遺跡」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1988

②西岡巧次他「長坂遺跡」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1990

12．上脇遺跡　①岸本一宏他『上脇遺跡Ⅰ、Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第232、233冊　兵庫県教育委員会　2002

13．表山遺跡　①深江英憲他『表山遺跡・池ノ内群集墳』兵庫県文化財調査報告第202冊　兵庫県教育委員会　2002

14．頭高山遺跡　①宮本郁雄他「頭高山遺跡」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1985

②菅本宏明他「頭高山遺跡」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1986

③内藤俊哉他「頭高山遺跡第７次調査」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1999

④東喜代秀他「頭高山遺跡第７次調査」『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2000

15．出合遺跡　①富山直人他『出合遺跡　第27次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　1994

②「出合遺跡・亀塚古墳」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

16．今津遺跡　①千種浩「今津遺跡」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1985

17．高津橋岡遺跡　①「高津橋・岡遺跡」『地下に眠る神戸の歴史展』神戸市立考古館　1980

18．高津橋大塚遺跡　①安田滋他『白水遺跡第３.６.７次・高津橋大塚遺跡第１.２次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2000

19. 白水遺跡　①安田滋他『白水遺跡第3.6.7次・高津橋大塚遺跡第1.2次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2000

②眞野修他『神戸国際港都建設事業白水特定土地区画整理に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録 白水遺跡 '94～ '96』白水遺跡発掘調査団（兵庫考古学研究会）1997

20. 小山遺跡　①斎木巖「小山遺跡」『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1996

②斎木巖他「小山遺跡」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1997

③斎木巖他「小山遺跡」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1998

21. 居住遺跡　①山本雅和他「居住遺跡第8次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1994

②丸山潔『新方遺跡発掘調査概要・居住遺跡発掘調査概要』神戸市教育委員会　1984

22. 二ッ屋遺跡　①前田佳久他「二ッ屋遺跡」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1995

②前田佳久「二ッ屋遺跡第1次調査」『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1996

23. 居住・小山遺跡　①千種浩「居住・小山遺跡」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1985

24. 玉津田中遺跡　①篠宮正他『神戸市西区玉津田中遺跡第6分冊（総括編）』兵庫県文化財調査報告第135-6冊 兵庫県教育委員会　1996

②谷正俊他『玉津田中遺跡発掘調査報告書　第8.10.12.13.15次調査』神戸市教育委員会　2000

25. 菅野遺跡　①池田毅「松本遺跡・菅野遺跡」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1998

②黒田恭正他「菅野遺跡第2次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1999

26. 西神ニュータウン第62号遺跡

①黒田恭正他「西神ニュータウン第62地点遺跡第5次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1998

②佐伯二郎他「西神ニュータウン第62地点遺跡第6次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1998

27. 栃木遺跡　①西岡巧次他「栃木遺跡」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1997

②西岡巧次他「栃木遺跡」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1998

28. 青谷遺跡　①赤松啓介「神戸市垂水区青谷遺跡出土の石戈（一）－弥生時代流通経済の一試論－」『考古学雑誌』59-3　1973

②「青谷遺跡」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

29. 城ヶ谷遺跡　①東喜代秀他「城ヶ谷遺跡第1次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1998

②山本雅和他「城ヶ谷遺跡第2次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1999

③山本雅和他「城ヶ谷遺跡第3次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2000

30. 印路遺跡　①池田毅他「印路遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1992

31. 西戸田遺跡　①丹治康明「西戸田遺跡」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1983

32. 西神ニュータウン第50号遺跡

①「西神ニュータウン内第50号地点遺跡」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

33. 西神ニュータウン第65号遺跡

①千種浩他「西神ニュータウン内遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1987

②渡辺伸行「西神ニュータウン内遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1989

34. 大畑遺跡　①東喜代秀「大畑遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1992

②谷正俊「大畑遺跡」『平成２年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1993

35. 常本遺跡　①「常本遺跡」『地下に眠る神戸の歴史展』神戸市立考古館　1980

②「常本遺跡」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

36. 黒田遺跡　①「黒田遺跡」『地下に眠る神戸の歴史展』神戸市立考古館　1980

②「黒田遺跡」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

37. 養田中ノ池遺跡　①「養田中ノ池遺跡」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

A. 水谷大東古墳　①　山本雅和「水谷大東古墳」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1999

B. 延命寺古墳　①多淵敏樹・喜谷美宣「延命寺古墳」『日本考古学年報』27　日本考古学協会　1976

C. 高津橋大塚古墳　①安田滋他『白水遺跡第３.６.７次・高津橋大塚遺跡第１.２次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2000

D. 延命寺２号墳　①　〃

E. 瓢塚古墳　①山本雅和「白水瓢塚古墳」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1990

②　〃　「白水瓢塚古墳」『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1996

③須藤宏「白水瓢塚古墳第５次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2001

④西岡巧次「白水瓢塚古墳第８次調査」『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2001

⑤安田滋「白水瓢塚古墳第９次調査」『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2001

F. 天王山古墳群　①「天王山４号墳」『地下に眠る神戸の歴史展』神戸市立考古館　1980

②「天王山古墳群」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

G. 鬼神山古墳　①「鬼神山古墳」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

H. 柿谷１号墳　①「柿谷古墳群」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

I. 王塚古墳　①「王塚古墳」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

②清喜裕二他「平成12年度陵墓関係調査報告　玉津陵墓参考地墳丘裾・外堤内法裾護岸工事区域の調査」『書陵部紀要』第53号　宮内庁書陵部陵墓課　2002

J. 亀塚古墳　①「出合遺跡・亀塚古墳」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

K. 中村５号墳　①石野博信他『中村古墳群発掘調査報告』兵庫県教育委員会　1969

L. 下大谷１号墳　①篠宮正『下大谷古墳群・印路古墳群Ｃ・印路台状墓』兵庫県文化財調査報告第106冊　兵庫県教育委員会　1992

M. 西神ニュータウン第55号墳

①千種浩他「西神ニュータウン内遺跡」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1988

N. 西神ニュータウン第44号墳

①喜谷美宣他「第44号墳」『西神ニュータウン内の遺跡　中間報告Ⅰ』神戸市　1972

O. 西神ニュータウン第30ー1号墳

①喜谷美宣他「第30－1号墳」『西神ニュータウン内の遺跡　中間報告Ⅰ』神戸市　1972

②菅本宏明他「西神ニュータウン内遺跡」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1983

P. 堅田神社１号墳　①「堅田神社境内古墳群」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989

Q. 鍋谷池古墳群　①富山直人他「鍋谷池遺跡」『平成２年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1993

R. 七曲り古墳群　①千種浩「七曲り６号墳」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1986

第２節　既往の調査概要

水谷遺跡は、平成３年度に水谷地区の特定土地区画整理事業に伴い、発掘調査が行われ、平安時代末期頃の掘立柱建物や中世の溝等が確認された。以後、数次にわたる調査によって、古墳時代初頭～中世にわたっての遺構・遺物が発見された。

これらの中で特に注目されるのは、古墳時代中期末～後期初めの古墳群である。平成８年度に発掘調査された、水谷大東古墳はその中の代表的な古墳で、南西に造り出し部を有する全長約20mの帆立貝形を呈する。

墳丘は後世の耕作地造成の際に削平され、周溝のみが残存しているが、その外側の一部に円筒埴輪の基部が列をなして残っていた。周溝内には、埴輪や土器が流れ込んだ状態で発見された。円筒埴輪の他に、鶏形、人物、盾形の埴輪が、破片の状態で出土した。

平成10年度の第７次調査では、狭い範囲の調査のため、古墳の全容がつかめなかったものの、方墳の周溝の可能性が高い溝が確認され、円筒、馬形、盾形、靫形埴輪片および土器片が出土している。

これまでの各調査の概要は、fig.　５のとおりである。

馬掛原遺跡は、今回の調査で新たに発見された遺跡であるため、調査履歴はない。

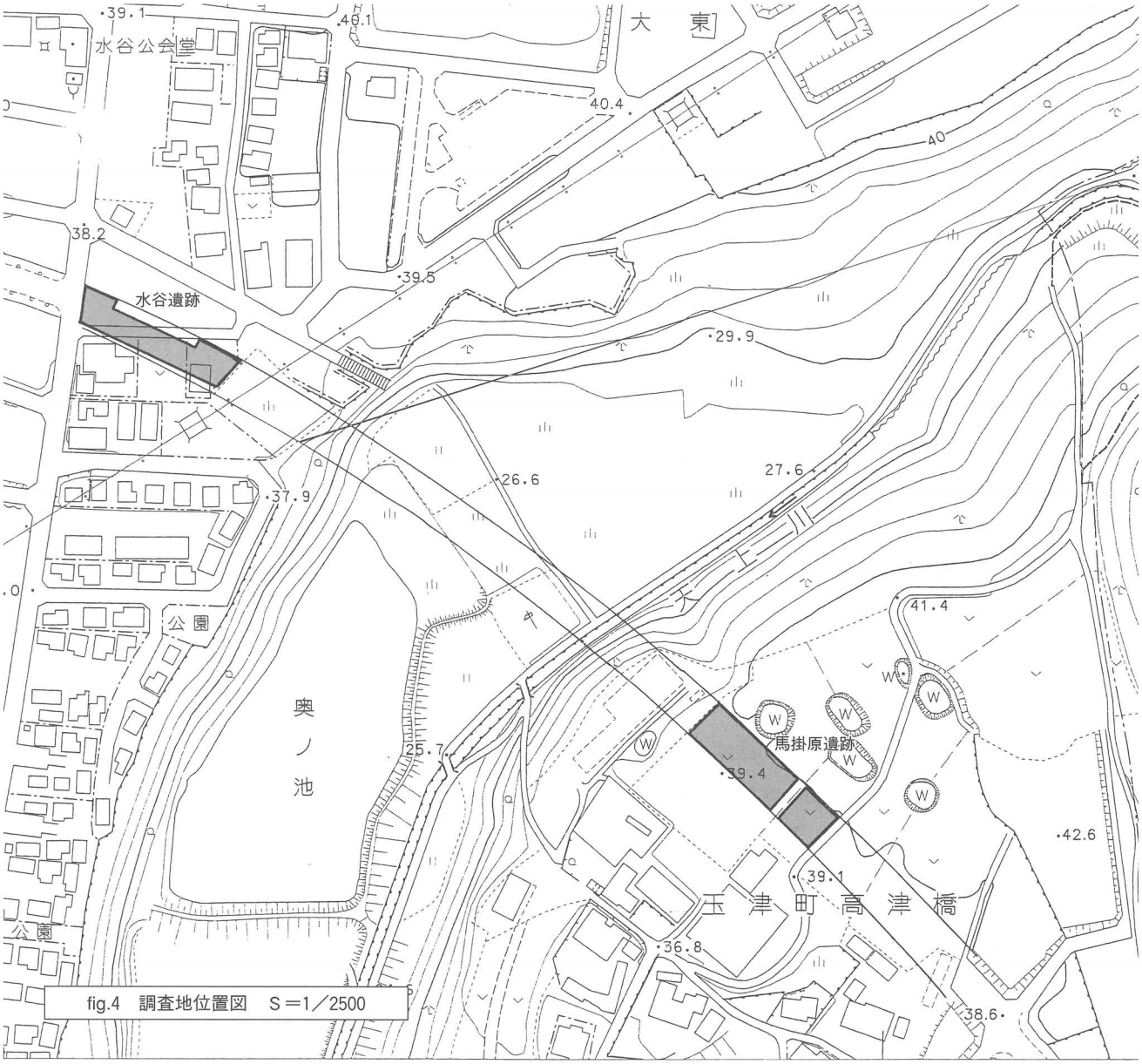


fig.4　調査地位置図　S＝1／2500

調査次数	調査年月日	事 業 名	調査主体	調査担当者	調査面積	主な遺構・遺物	神戸市埋蔵文化財年報での次数
第１次調査	平成3.3.25～8.21	区画整理事業	㈶神戸市スポーツ教育公社	西岡巧次・西岡誠司	1,264㎡	平安時代掘立柱建物・中世溝・中世以降の土坑	
〃	平成3.11.11～11.13	〃	〃	佐伯二郎・井尻格	64㎡	試掘調査	
第２次調査	平成5.8.9～9.30	共同住宅建設	神戸市教育委員会	内藤俊哉	200㎡	掘立柱建物・落ち込み	
第３次調査	平成6.9.26～10.12	宅地造成	〃	山口英正	280㎡	中世の水田	
第４次調査	平成7.11.13～8.3.29	区画整理事業	〃	斎木　巌・阿部　功	3,340㎡	水田遺構・弥生～古墳時代のピット・土坑	
第５次調査	平成8.4.2～6.28	〃	㈶神戸市スポーツ教育公社	山本雅和・浅谷誠吾	650㎡	庄内式～布留式併行期の土坑群	
第６次調査	平成8.4.4～6.14	〃	神戸市教育委員会	〃	570㎡	水谷大東古墳(全長20m・直径15m・帆立貝形古墳)	平成８年度年報・第５次調査
第７次調査	平成8.4.11～4.18	個人住宅建設	神戸市教育委員会	井尻　格	70㎡	中世のピット	平成８年度年報・第６次調査
第８次調査	平成10.10.6～11.2	区画整理事業	㈶神戸市体育協会	西岡巧次・中谷　正	92㎡	水谷２号墳(方形墳または帆立貝形古墳の造り出し部分)	平成10年度年報・第７次調査
第９次調査	平成15.1.22～2.12	共同住宅兼店舗建設	神戸市教育委員会	阿部　功	234㎡	鋤溝・古墳時代ピット	
第10次調査	平成15.8.29～10.17	道路建設事業	㈶神戸市スポーツ教育公社	谷　正俊	550㎡	水谷３．４．５号墳(方形、円形墳)	

fig.5　水谷遺跡・調査次数一覧表

第３節　調査にいたる経緯

１．都市計画道路出合新方線

第１節で述べたような、住宅建設などの開発が進む、西区内に計画された都市計画道路出合新方線は、すでに昭和50年に全線計画決定が行われている。この道路は、全長5.1km、幅員平均16mで、玉津町出合から今津を抜け、水谷・白水地区等の「西神戸グリーンタウン」と呼ばれる区画整理事業地内を通過して、玉津町新方で都市計画道路玉津鳥羽線と結ばれる。西区を縦横に貫く第２神明道路、国道175号線、主要県道神戸明石線（旧神明道路）等の既存幹線道路に集中する交通量の渋滞緩和の役割を担っている。

2．潤和工区

この当路線計画地内の潤和工区では、下記のような周知の埋蔵文化財包蔵地を通過し、試掘調査でも遺物包含層や遺構などが確認されたため、工事に先行して発掘調査を実施した。

平成12年５月から14年10月にかけて、断続的に調査を行った結果、今池尻遺跡（第２・３次調査）では、弥生中期～後期末の竪穴住居や土坑、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物・水田址、平安時代後期の掘立柱建物・耕作痕などが発見された。また、新方遺跡平松地区（第３次調査）では弥生時代後期の溝・ピット、平安時代中・後期の掘立柱建物、鎌倉時代初めの溝・土坑・ピットなどが検出されている。さらに新方遺跡（第44次調査）では、弥生時代前期～古墳時代にかけての竪穴住居・土坑・溝・流路や平安時代中期の掘立柱建物などを確認するなど、多くの成果を得た。これらの調査報告書は、平成15年３月に『都市計画道路出合新方線街路築造事業に伴う今池尻遺跡・新方遺跡平松地点－発掘調査報告書－』として刊行されている。

3．白水工区

潤和工区の北側に位置する白水工区は、白水地区の特定区画整理事業地内を通過する。その事業地内では平成８年に古墳時代中期～後期の木棺直葬墳（高津橋大塚古墳）と２基の古墳と推定される周溝を確認した。これらの調査成果については、平成12年３月に『白水遺跡第３．６．７次・高津橋大塚遺跡第１．２次発掘調査報告書』としてすでに報告されている。

4．試掘調査および馬掛原遺跡の発見

それより以北の白水・高津橋工区ついては、路線敷のごく一部が水谷遺跡の範囲にかかる程度で、今回報告する馬掛原遺跡については遺跡の存在も明らかになっておらず、開発担当部局も埋蔵文化財の取り扱いに

ついては、深く認識していなかった。しかし、平成16年６・７月に行われた試掘調査によって、路線計画地内で新たに埋蔵文化財包蔵地が確認され、付近の小字名により馬掛原遺跡と命名された。また、従来の水谷遺跡の範囲に接した路線敷内においても遺構、遺物が発見され、いずれの部分においても発掘調査が必要となり、開発部局、教育委員会ともに、急遽その対応を迫られることとなった。

第４節　調査の実施状況

１．水谷遺跡

本書に掲載の調査地は、神戸市西区水谷１丁目３番に位置する。平成10年に実施された第７次調査の南西に20mほど隔たった部分にあたる。

第３節で述べたとおり、急遽、発掘調査が必要となったため、すでに工事発注が行われており、高津橋地区と水谷地区を隔てる谷に架橋するための基礎工事が始まっていた。その資材・土砂などを搬入するための仮設道路を確保しながら、調査を行う必要が生じた。そのため路線敷の約半分を調査し、作業完了後、埋め戻しを行い、反対側を掘削するということと、家屋の出入り口の部分を塞がないというふたつの条件をクリヤするために、調査地全体を三分割した。

調査期間は、平成15年８月29日～10月17日、調査面積は約550㎡である。

２．馬掛原遺跡

調査地は神戸市西区玉津町高津橋に所在する。前節で触れたように、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなく、新たに発見された遺跡である。調査着手時には耕作地となっており、耕作土を除去する作業から着手した。耕作地を造成する際に削平を受けており、遺構の遺存状況は悪い。調査期間は、平成15年９月８日～10月20日、調査面積は約1000㎡である。

いずれの遺跡も調査の詳細については、第２・３章を参照されたい。

第５節　調査体制

発掘調査は、神戸市文化財保護審議会の指導のもと、以下の組織で実施された。

神戸市文化財保護審議会委員　史跡・考古担当（平成15・16年度）

檀上重光　前神戸女子短期大学教授

工楽善通　大阪府立狭山池博物館館長

和田晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局	平成15年度	平成16年度
調査の内容	現地発掘調査	遺物整理・報告書作成
教育長	西川和機	小川雄三
社会教育部長	高橋英比古	同左
社会教育部参事	桑原泰豊（文化財課長事務取扱）	同左
社会教育部主幹	渡辺伸行（埋蔵文化財係長事務取扱）	同左
同	宮本郁雄（埋蔵文化財センター所長事務取扱）	同左
埋蔵文化財調査係長	丹治康明	同左
文化財課主査	丸山　潔	同左
同	菅本宏明	同左
同	千種　浩	
事務担当学芸員	内藤俊哉	東喜代秀
遺物整理担当学芸員	西岡誠司	谷　正俊
保存処理担当	中村大介	同左
整理担当学芸員		谷　正俊・藤井太郎

㈶神戸市体育協会	平成15年度	平成16年度
調査の内容	現地発掘調査	遺物整理・報告書作成
会長	矢田立郎	同左
副会長	矢野栄一郎（専務理事事務取扱）	同左
常務理事	野浪建作	同左
総務課長	谷川博志	横関　勇
総務課主査	菅本宏明（兼務）	同左
事務担当学芸員	中谷　正	
調査担当学芸員	谷　正俊・藤井太郎	

fig.6　調査体制一覧表

第6節　調査日誌抄

水谷遺跡		馬掛原遺跡	
日付	作業内容	日付	作業内容
8／29	仮囲い設置・アスファルト敷・基礎コンクリート除去	9／8	資材搬入、埋設管の確認
9／1	A区機械掘削作業開始・建物基礎破砕	9／9	耕作土除去開始、仮囲い設置
9／3	A区西側から人力掘削開始、遺構検出面まで下げる	9／11	B区遺構面精査・ピット、溝確認
9／4	A区人力掘削、中央部で溝状遺構検出	9／12	A・B区の遺構検出作業
9／5	A区中央部で弧状の溝状遺構検出、土器類多数出土	9／16	A・B区の遺構検出作業続行中
9／8	A区中央部溝状遺構掘削、東端部でも新たな溝検出	9／18	A区遺構検出作業、B区遺構掘削作業
9／9	A区検出の溝は各々、3号墳・4号墳とする	9／19	A区遺構検出作業続行中、B区遺構から弥生土器出土
9／10	3号墳土器出土状況写真撮影	9／22	A区遺構検出、周溝墓の溝か？、B区遺構掘削作業
9／12	西端の溝状遺構は古墳周溝と判明、5号墳とする	9／23	A区の周溝墓は数基、B区ピット・溝状遺構半裁作業
9／13	4・5号墳の周溝のかかる部分を一部拡張	9／24	雨天のため現場養生作業
9／17	A区完掘状況写真撮影	9／25	雨天のため現場養生作業、排水作業
9／18	A区中央部、東端部平板測量	9／26	連日の雨で遺構の検出が容易となる
9／23	B区機械掘削作業、仮囲い設置	9／27	A区遺構検出作業、B区ピット半裁・写真撮影
9／26	B区遺構検出作業、5号墳の周溝を検出中	9／29	A区遺構検出作業、B区遺構断面図・平面図作成
9／29	B区5号墳の周溝精査、B区の全景写真撮影	9／30	A区全体精査、周溝墓、ピット検出、B区平面図作成
9／30	B区平板測量	10／1	A区周溝墓堆積土掘削、B区平面図作成
10／1	B区土層断面図作成、バックホーにて埋め戻し	10／2	A区平面図作成、B区遺構断面写真撮影
10／2	C区機械掘削作業	10／3	B区遺構堆積土掘削、断面写真撮影
10／3	C区遺構検出開始、3号墳の周溝プランが検出される	10／4	A区遺構断面写真撮影、遺構写真撮影、平面図作成開始
10／7	C区3号墳の周溝堆積土掘削、4号墳周溝検出作業	10／6	A区遺構精査を再度実施
10／8	C区3号墳の周溝堆積土掘削、4号墳周溝堆積土掘削	10／8	B区写真撮影、遺構精査を再度実施
10／10	C区全景写真撮影、土層断面図作成、基準点測量	10／10	A区遺構断面写真撮影、平面図作成
10／14	C区4号墳遺物出土状況図作成、3号墳図化作業	10／14	写真撮影準備、平面図作成
10／15	C区航空写真撮影、平板測量	10／15	航空写真撮影、その後全景写真撮影
10／16	平板測量の続き、下層確認の断ち割り作業	10／16	遺構部分写真撮影、平面図作成
10／17	現地調査完了、器材・資材撤去	10／20	平面図作成作業完了、器材・資材撤去

fig.7　調査日誌抄

第２章　水谷遺跡第10次調査

第１節　調査の方法

今回の調査地は、住宅地、駐車場やそれに進入する道路、畠地として利用されていた。調査に入る直前に、それらが除去されて道路建設用の仮設道路が設けられ、かなりの量の盛土が施されていた。発掘調査は、路線敷の予定地内で、試掘調査によって遺構、遺物が確認された部分について実施した。

道路建設用の仮設道路を確保しながら調査を行うため、予定範囲を細長く３分割（Ａ～Ｃ区）して調査を実施した。調査地内に点在するコンクリート基礎、アスファルト敷を建設機械で破砕した後、油圧ショベルで盛土・整地土・旧耕作土等の除去を行い、その後は人力で遺構の確認作業を行った。

また、各地区に測量杭を任意で打設し、それらの国土座標値を求めて、測量図面の整合性を高めた。

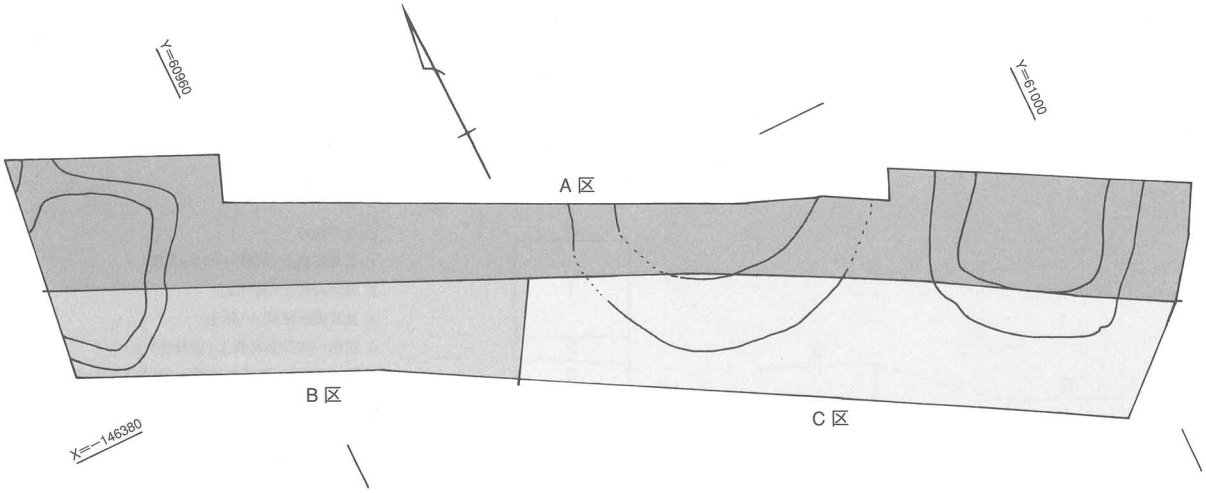


fig.8　調査区地区割図

0　10m

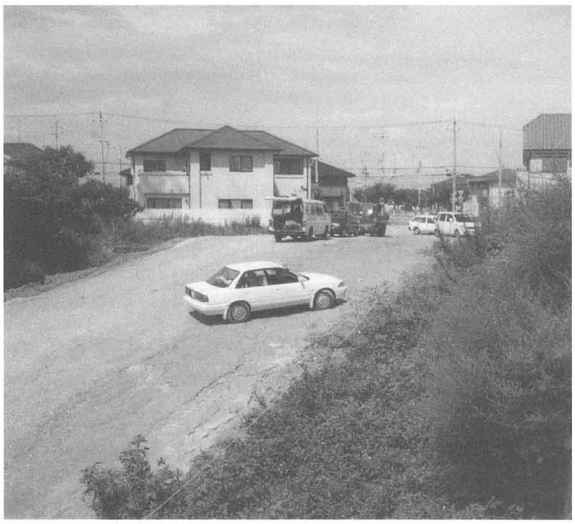


fig.9　調査前の状況

fig.10　人力掘削作業

第２節　調査成果

1. 基本層序

基本層序は、仮設道路用の盛土、宅地または道路の整地土、現代の耕作土が堆積し、部分的に旧耕作土（暗灰色粘質土：中・近世）が残っている部分があるが、現況耕作土・床土層直下で遺構が検出されるところが多い。また、耕作地造成の際に傾斜地には盛土（黄褐色系粘質土）を行っているが、この土の中には古墳時代の遺物を含んでいる場合があり、古墳の墳丘を削平して斜面に運んだ土が含まれると想定される。現代の耕作土から0.2～0.5m前後で遺構検出面（黄灰色・黄褐色シルト～極細砂）となる。

現況は、北東～南西にむけて下がっていく地形であり、遺構面のレベルは標高37.5m前後を測る。

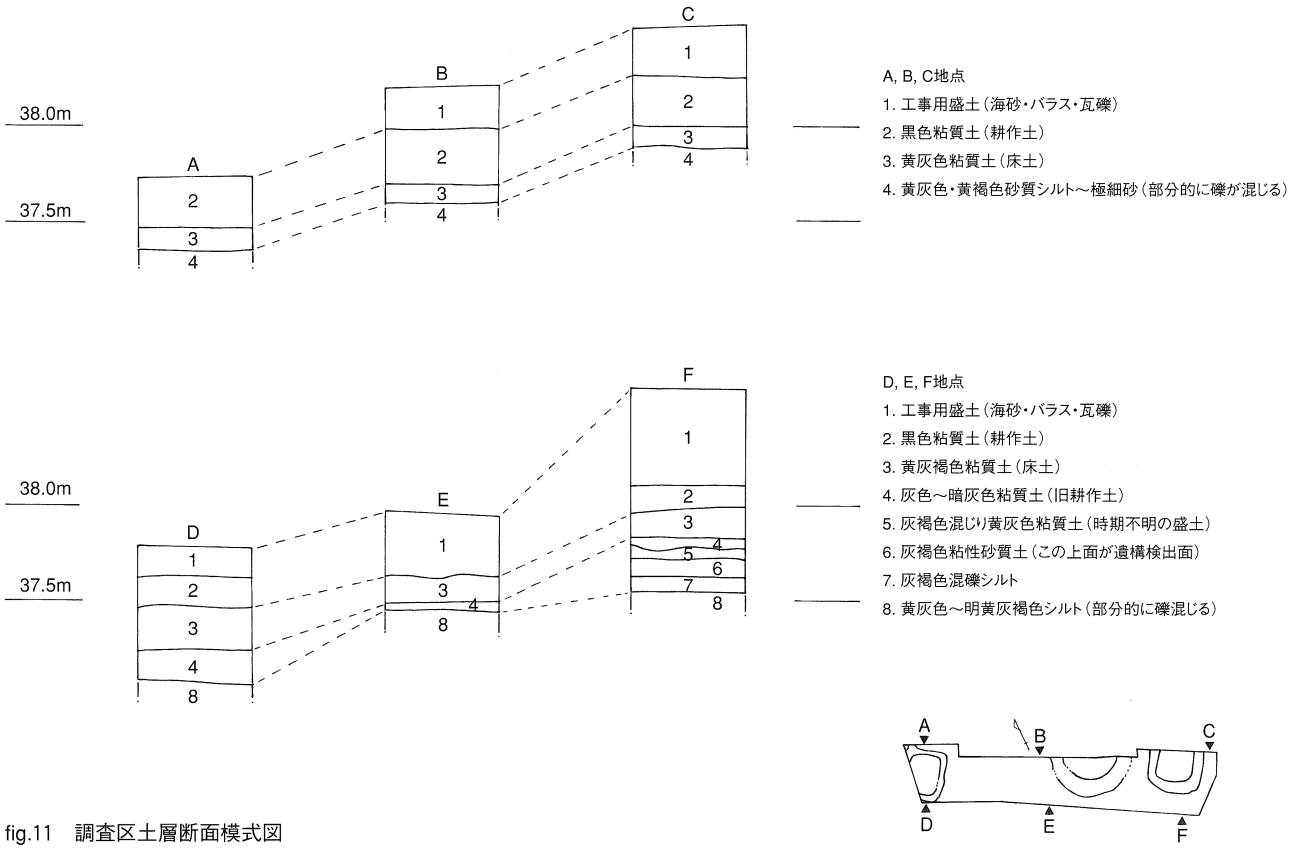


fig.11　調査区土層断面模式図

2. 遺構・遺物

(1) 古墳の発見

今回の調査では、古墳３基、中世～近世遺構にかけての耕作に伴う溝を検出した。古墳は調査範囲内では１／２ないしは２／３程度の検出に止まり、いずれの古墳も正確な墳形は判らない。

また、古墳は、すべて中・近世の耕作地造成時に墳丘が削平され、さらに地山（遺構検出面）である黄灰色・黄褐色シルト～極細砂も、埋設管や建物基礎等で部分的には削られており、周溝の一部が欠失するものがあり、埋葬主体部についても全く判らなかった。

なお、古墳の番号については、これまでの調査成果から、水谷大東古墳（水谷１号墳）、平成10年度の区画整理に伴う発掘調査で確認された古墳（今回の調査地の約20m北東）が水谷２号墳とされており、今回の調査で発見された３基の古墳は、検出された順に３号墳～５号墳の番号を付した。

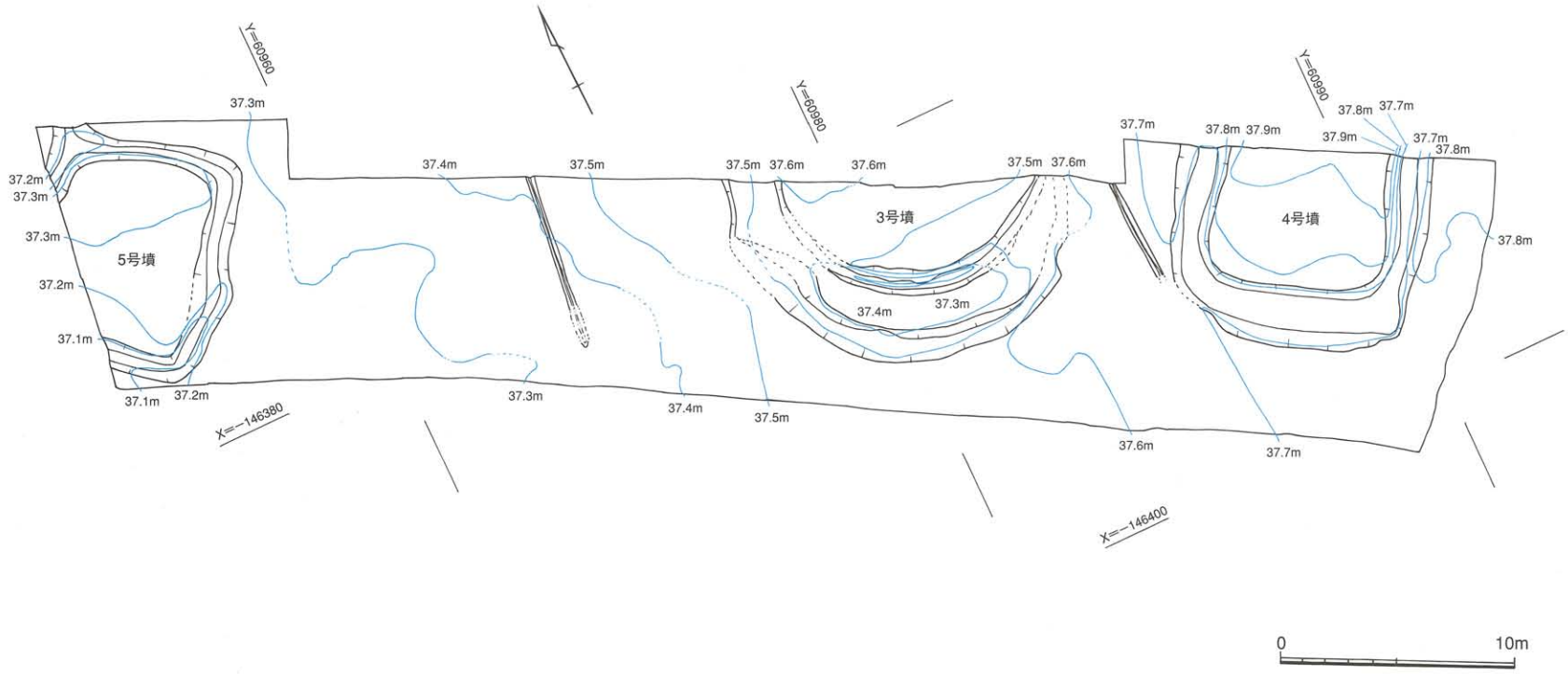


fig.12　調査区平面図

(2) 3号墳

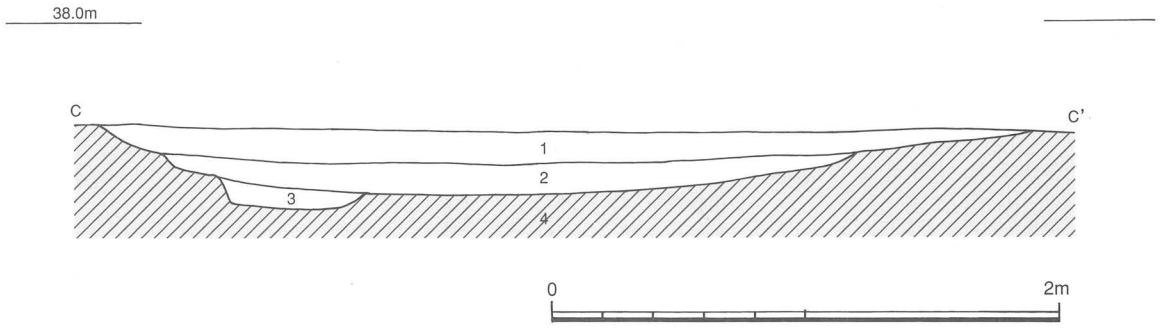
調査地中央やや東よりで発見された。直径約10m、周溝の幅2～4mの円墳と推定されるが、造り出し部を北または北東に向ける帆立貝形古墳の可能性も否定できない。

全体の約1／2は調査地区外であり、道路に敷設された水道や排水管、建物基礎によって古墳周溝が激しく削られており、墳形が不明瞭な部分がある。

周溝

墳丘盛土は全く残っていなかった。そのため、埋葬施設は不明である。耕作地開墾時に削平を受けていることから、周溝は北側が浅く、南側が深い、南端の一番広い部分で幅約4m、深さ0.3mを測る。また、墳丘基底部に沿って幅約1m、深さ約0.1～0.2mの溝を、周溝の中にさらに掘り込んでいる。また、周溝の底付近には、黄灰色系粘質土が堆積し、墳丘の土が築造後、時間を経ずに流失して、溝内に溜まったと推定される。また、その上層には暗灰・褐色粘質土が堆積し、窪地として残っていた溝が徐々に埋没していったものと判断される。

溝内には、須恵器坏、壷等が破片の状態で散乱していた。墳丘上に置いていたものが、墳丘盛土の流失とともに、溝内に転落したものと推定される。



1. 暗褐色粘質土
2. 褐色混じり暗灰色粘質土
3. 黄褐色混じり暗灰色砂質シルト
4. 黄灰色砂質シルト

fig.13　3号墳周溝断面図

fig.14　3号墳周溝堆積土掘削作業

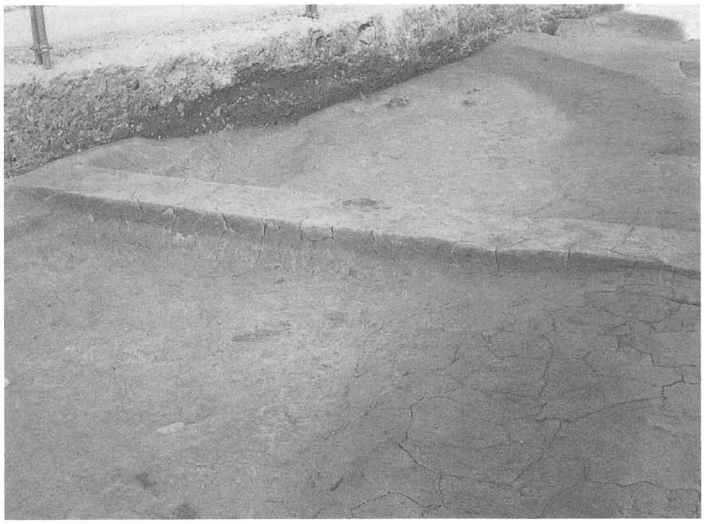


fig.15　3号墳周溝セクション

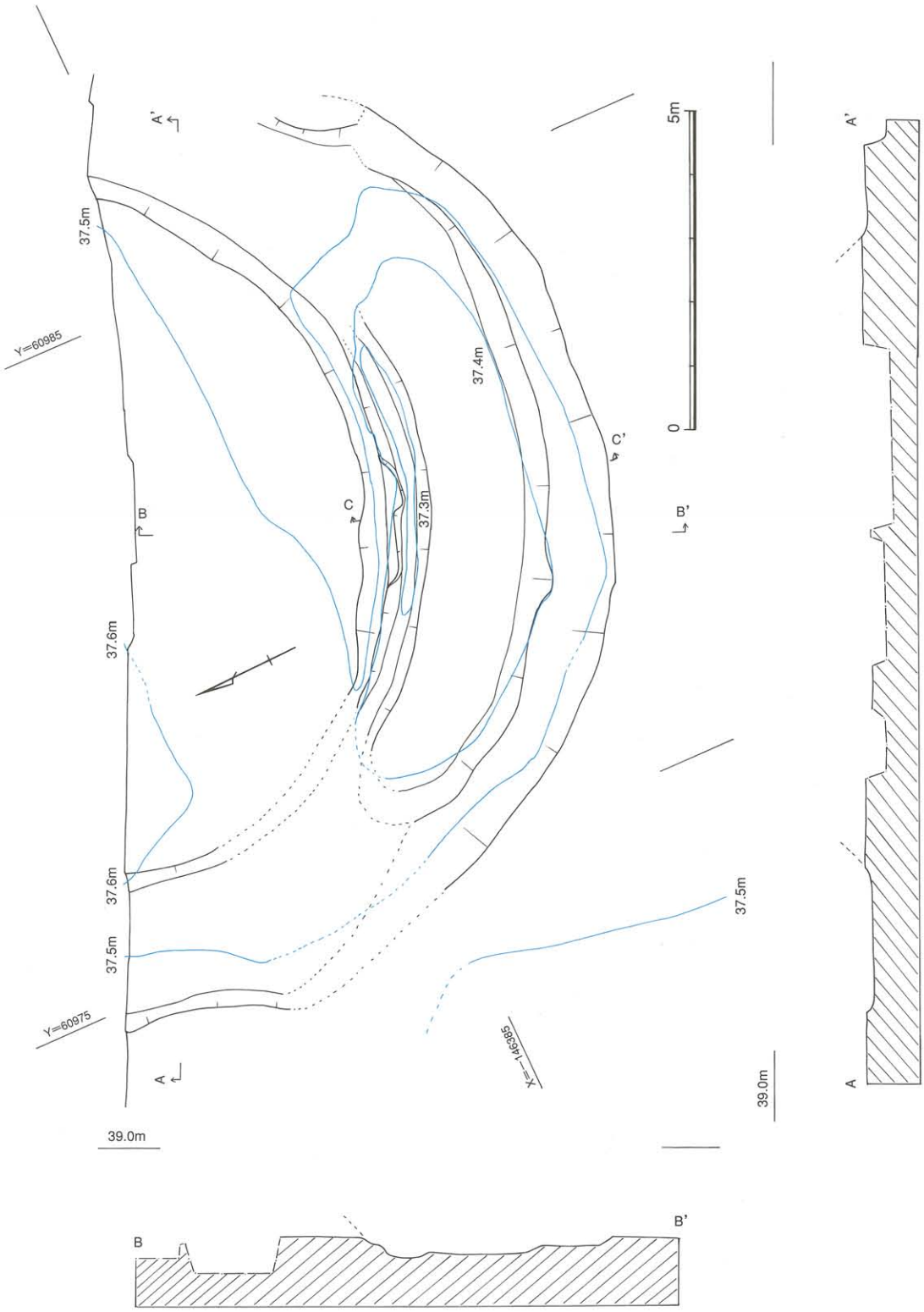


fig.16　3号墳平・立面図

fig.17　3号墳周溝内
土器出土状況図

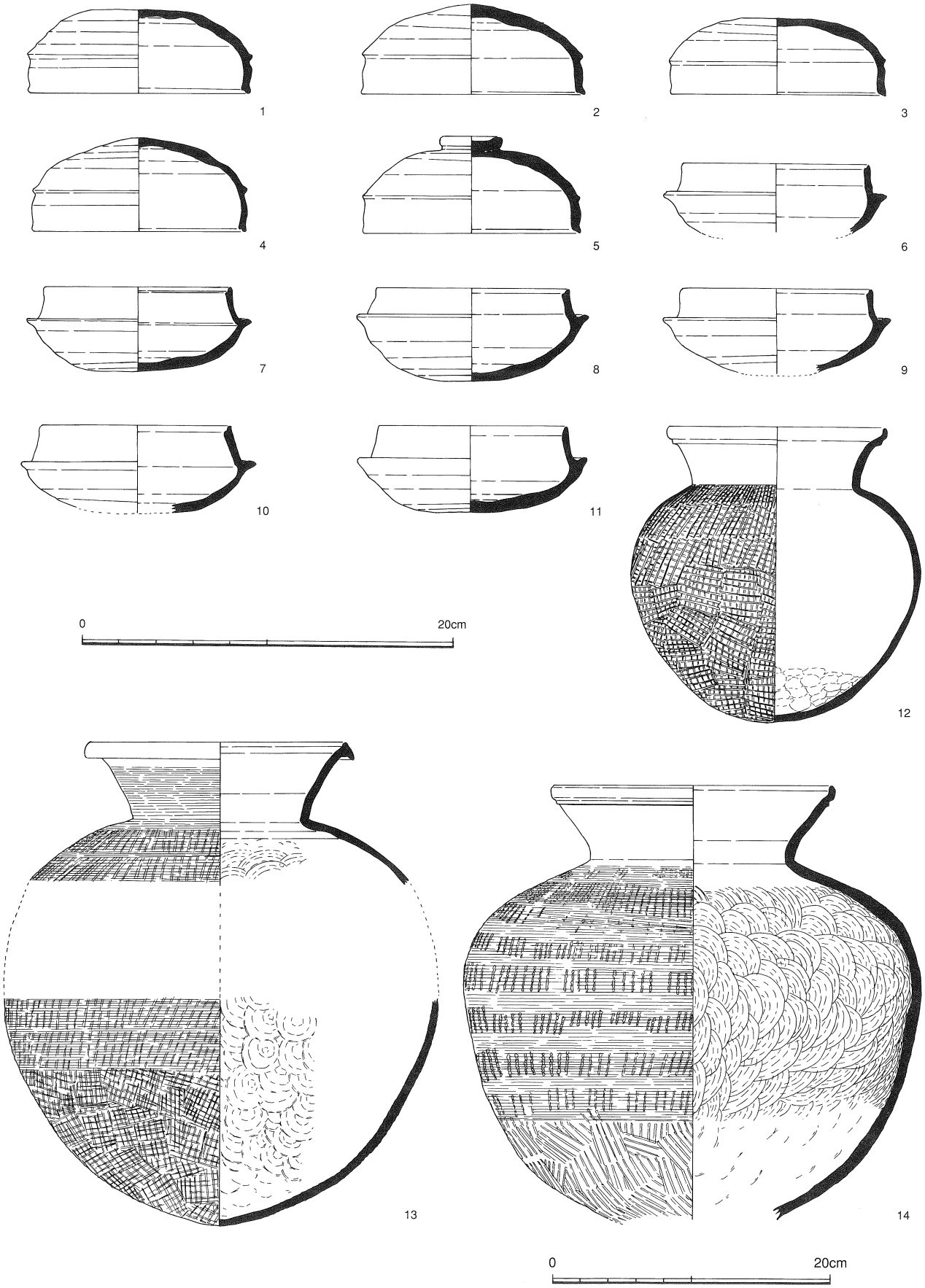


fig.18　3号墳周溝出土土器（1～11は1／3、12～14は1／4スケール）

遺物

図化できたものはすべて須恵器である。１～４は坏蓋で、内面および口縁部は回転ナデにより成形し、丸く高い天井部は回転ヘラ削りで調整する。口縁端部に明瞭な段を有する。口径は12cm前後、器高は４～５cm前後である。５は有蓋高坏の蓋で上面に窪んだつまみを持つ。７～11は坏身で、口径10cm前後、器高は５cm前後である。12は小型の甕、13、14は中型の甕で、胴部内外面にタタキ目、胴部外面上半部にカキ目を施す。

(3) ４号墳

調査地東端で発見された。一辺約８m、周溝の幅２～2.5mの方墳と推定される。

周溝

全体の約２／３を発掘した。周溝は一部を耕作地造成の際に削られている他は、良好に遺存している。しかし、墳丘盛土は全く残っておらず、地山を削りこんだ基底部も攪乱が著しい。以上の状況から埋葬施設は明らかにできなかった。ただし、基底部東端の地山直上から、焼土塊や炭が集中して出土する所があり、古墳築造時に何らかの祭祀を行った痕跡の可能性がある。

周溝は幅約２～2.5m、深さ0.2m程度残る。３号墳と同様に、溝の底付近には、墳丘盛土と推定される灰褐色粘質土が流失して、溝内に堆積したと推定される。また、その上層には暗褐色粘質土が堆積し、３号墳と同様の埋没状況であろうと判断される。

溝内からは、須恵器樽形瓶、埴輪片が破片の状態で出土した。それぞれ現位置は留めておらず、墳丘または周溝外に置かれていたものが、溝内に転落したものと推定される。

なお、４号墳の周溝検出作業時に、耕作地造成時の盛土内から、須恵器、土師器片と共に滑石製の紡錘車が１点出土した。これらの遺物は、耕作地を造った際に墳丘盛土を削平して、低い所を埋めた土から出土したため、４号墳に伴うものの可能性が高い。

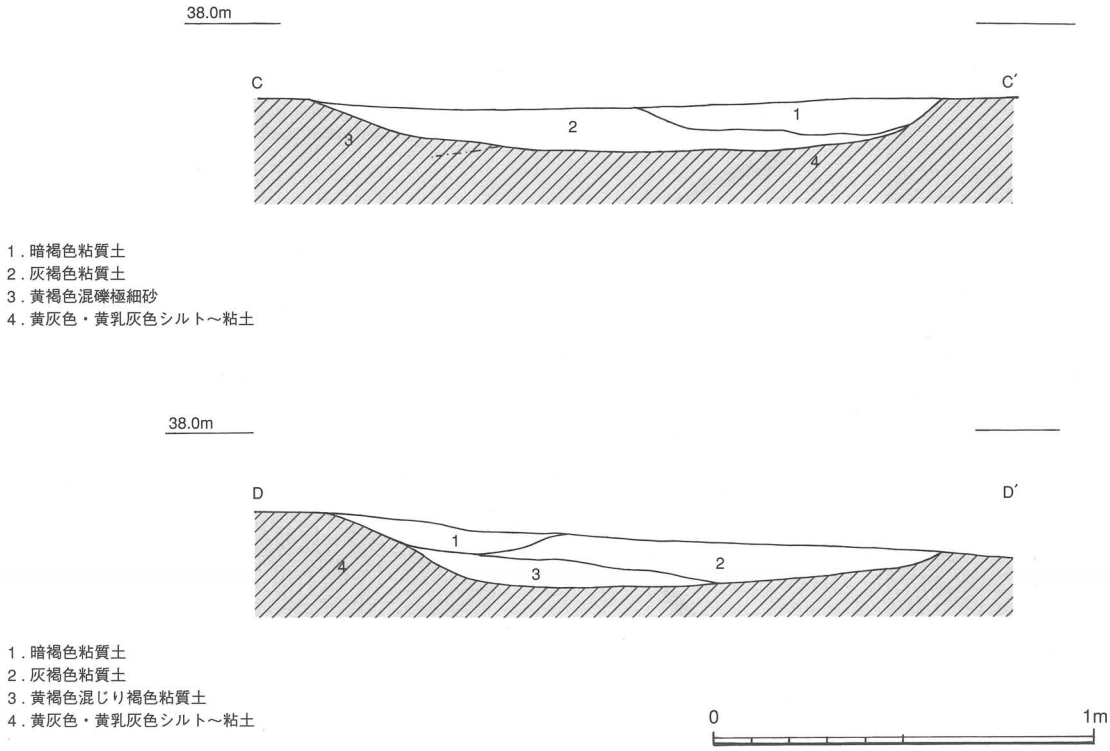


fig.19　４号墳周溝断面図

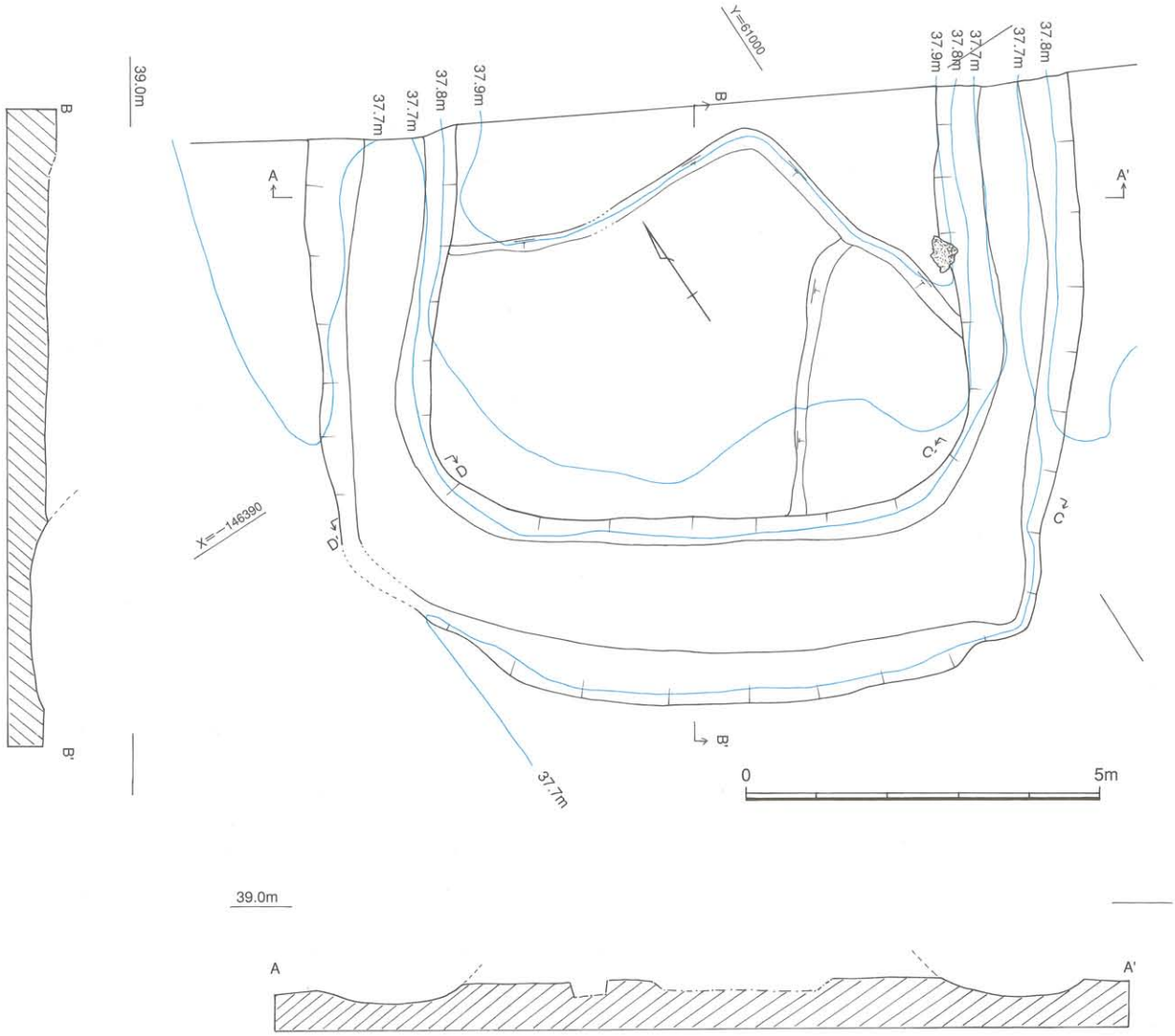


fig.20　4号墳平・立面図

fig.21　4号墳周溝掘削作業

fig.22　4号墳周溝セクション

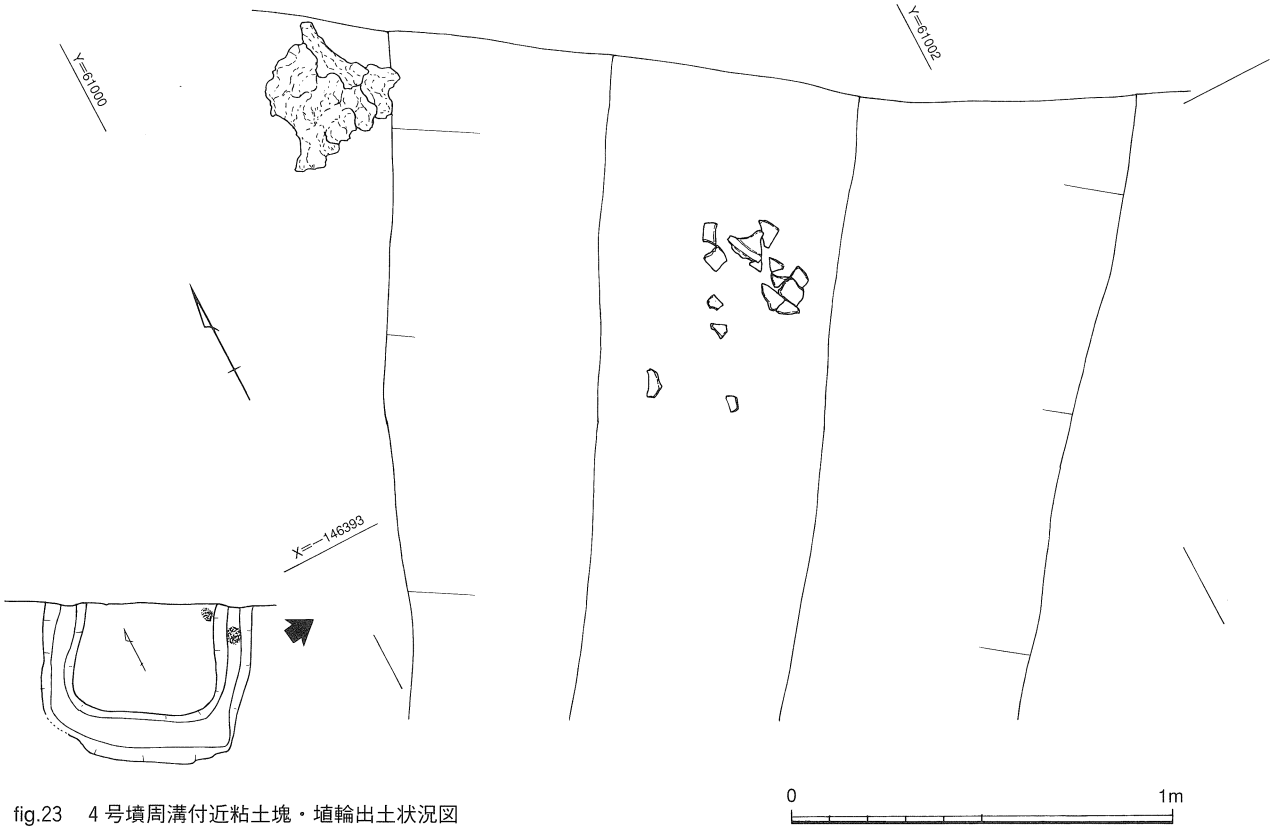


fig.23　4号墳周溝付近粘土塊・埴輪出土状況図

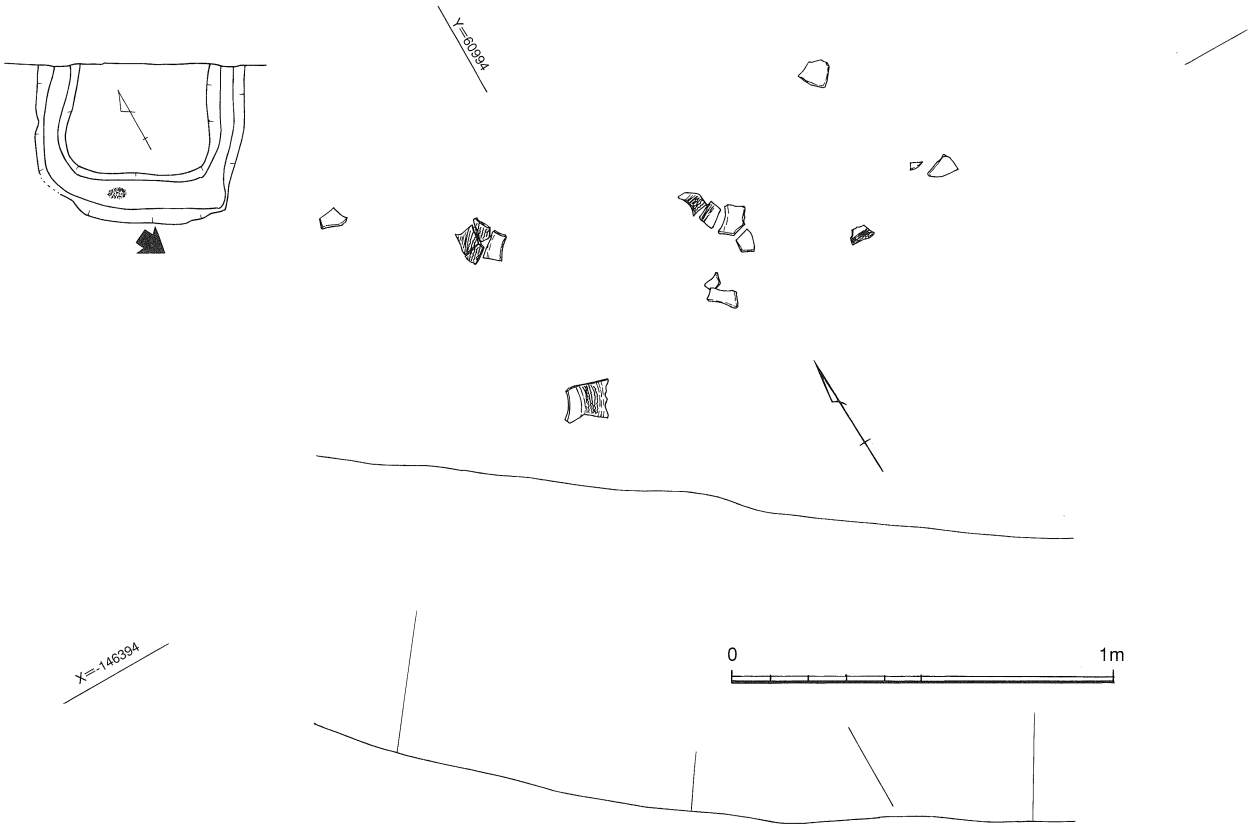


fig.24　4号墳周溝内土器出土状況図

遺物

15は須恵器の樽型瓶で、４号墳周溝内から出土した。

残存長20cm、残存する器高17cmで、直径9.5cmの円形の両端部を有する。この部分には本来円盤状の粘土板が貼り付くはずであるが、両端ともに欠失している。割れた部分にも自然釉がわずかにかかることから、焼成時に、内部の空気の膨張で両端部が爆ぜて失われたものと考えられる。注ぎ口の孔と径が小さい口頸部の基部がわずかに残っている。外面には櫛描きの波状文と沈線が施されている。

16、17、19は須恵器坏蓋で、内面および口縁部は回転ナデにより成形し、丸く高い天井部は回転ヘラ削りで調整する。17、19は明瞭な稜を有するが、16は稜が段となり、やや外反する口縁部端部を持つ。口径は12cm前後、器高は４cm程度である。18は須恵器坏身である。坏蓋と同様に内面および口縁部は回転ナデにより成形し、底部は回転ヘラ削りで調整する。立ち上がりの段はあまり明瞭でない。口径10cm、器高4.5cmを計る。16～19は４号墳上層の黄灰色粘質土から出土している。

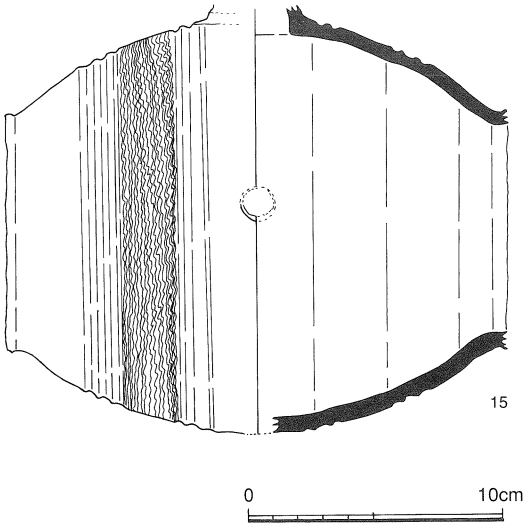


fig.25　４号墳周溝出土土器

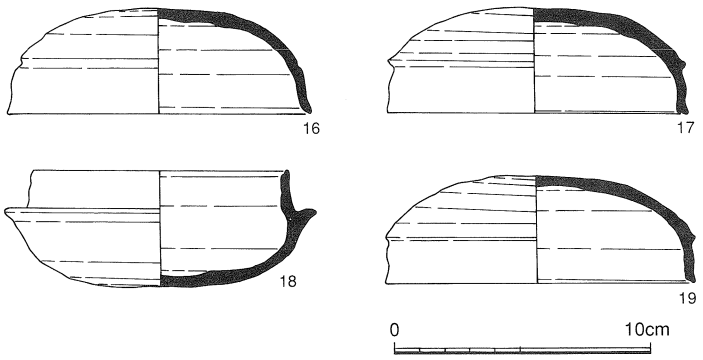


fig.26　４号墳上層（黄灰色粘質土）出土土器

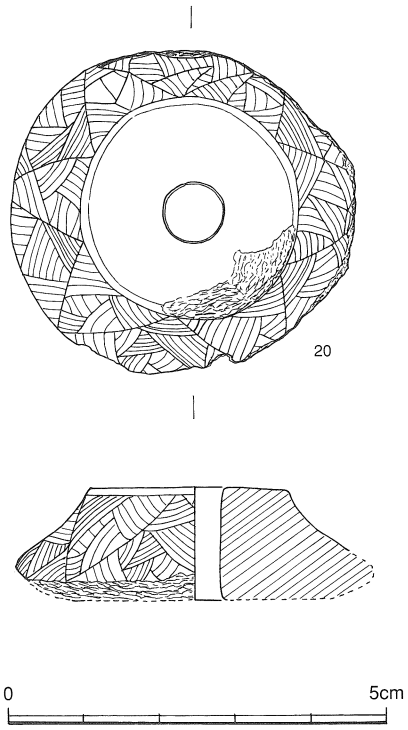


fig.27　４号墳上層（黄灰色粘質土）出土石製紡錘車

20は滑石製の紡錘車で、現存の直径4.5cm、高さ1.5cmを測り、外面には、上下にかみ合う鋸歯文の中に、弧状あるいは直線状の線刻を施す。後世の撹乱時に損傷を受けた様で、周縁と底面の磨滅、剥離は著しく、文様の確認はできない。この紡錘車も４号墳上層の黄灰色粘質土から出土している。

21～26は埴輪で、21～24、26は土師質、25は須恵質である。４号墳周溝（21～24、26）およびその上層の黄灰色粘質土（25）から出土した。21は、円筒埴輪の口縁部で、内面には横方向のハケ、外面には縦方向のハケを施す。22～24は円筒埴輪と思われ、断面台形のタガが貼り付けられる。外面に縦方向のハケ目が残るものもあるが、多くは、表面が剥離しており観察ができない。25は、タガの中央がやや窪む。26は、帯状の粘土紐を作り出した形象埴輪で、人物埴輪の襷の部分を表現したものである可能性が高い。

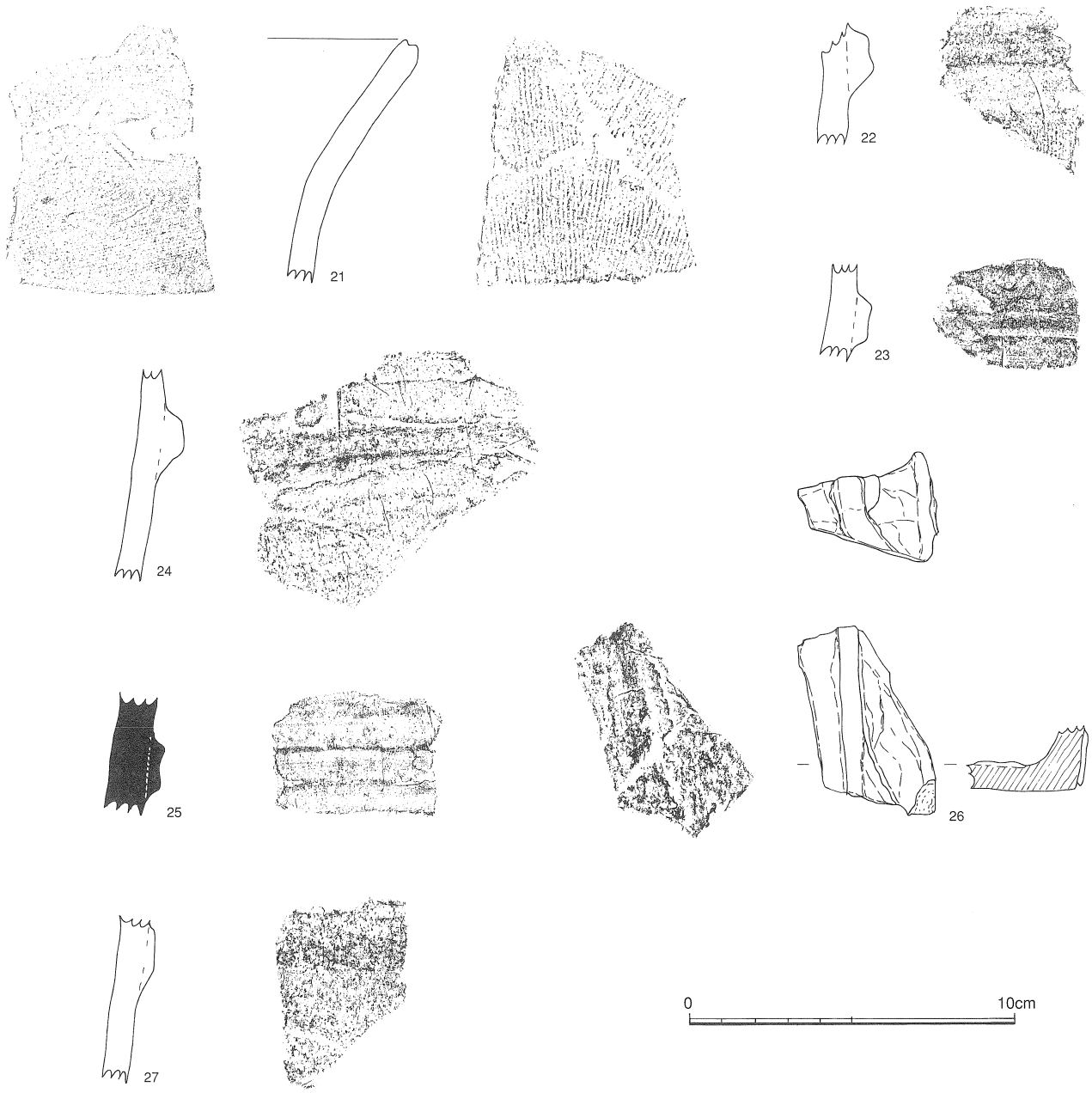


fig.28　4、5号墳周溝、黄灰色粘質土出土埴輪

(4)　5号墳

調査地西端で発見された。8.5m ×6.5m、周溝の幅1m前後の方墳と推定される。

周溝

全体の約2／3ほどを確認した。周溝は北端部で北に分岐しており、その先は調査区外で不明であるが、他の古墳と溝を共有している可能性がある。墳丘盛土は残存しておらず、地山を削りこんだ基底部まで後世の攪乱が著しいため、埋葬施設は分らない。

周溝は幅約0.8～1.2m、深さ約0.1mを測る。周溝の南半部は堆積土に炭片を含むが、土質が地山と変わらず、遺構検出が困難であった。周溝内の遺物は非常に少なく、本来この古墳に伴うものかは不明である。

遺物

Fig.28の27が図化できただけである。これは、土師質の円筒埴輪で、低く幅広いタガが貼り付けられる。

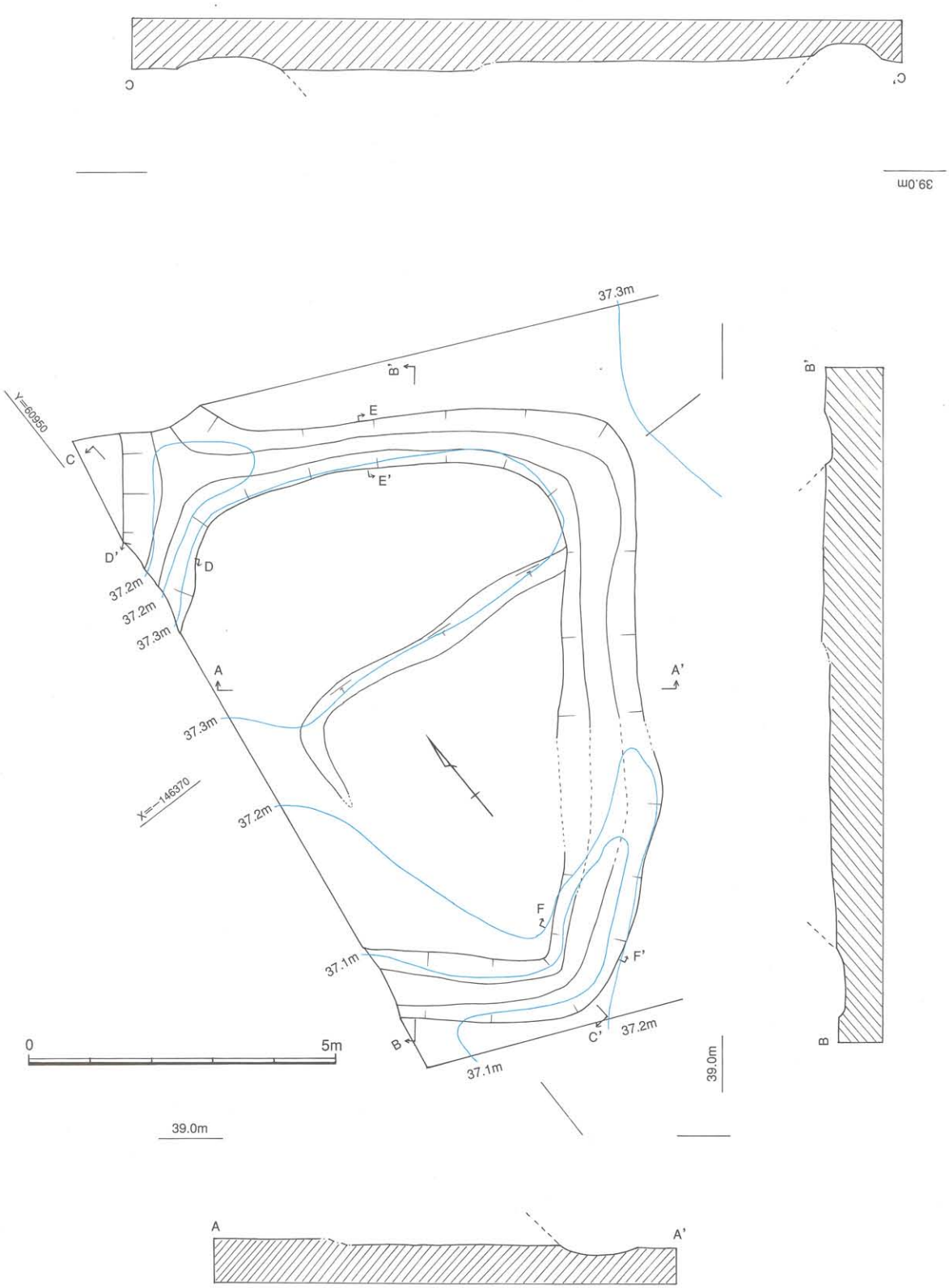


fig.29　5号墳平・立面図

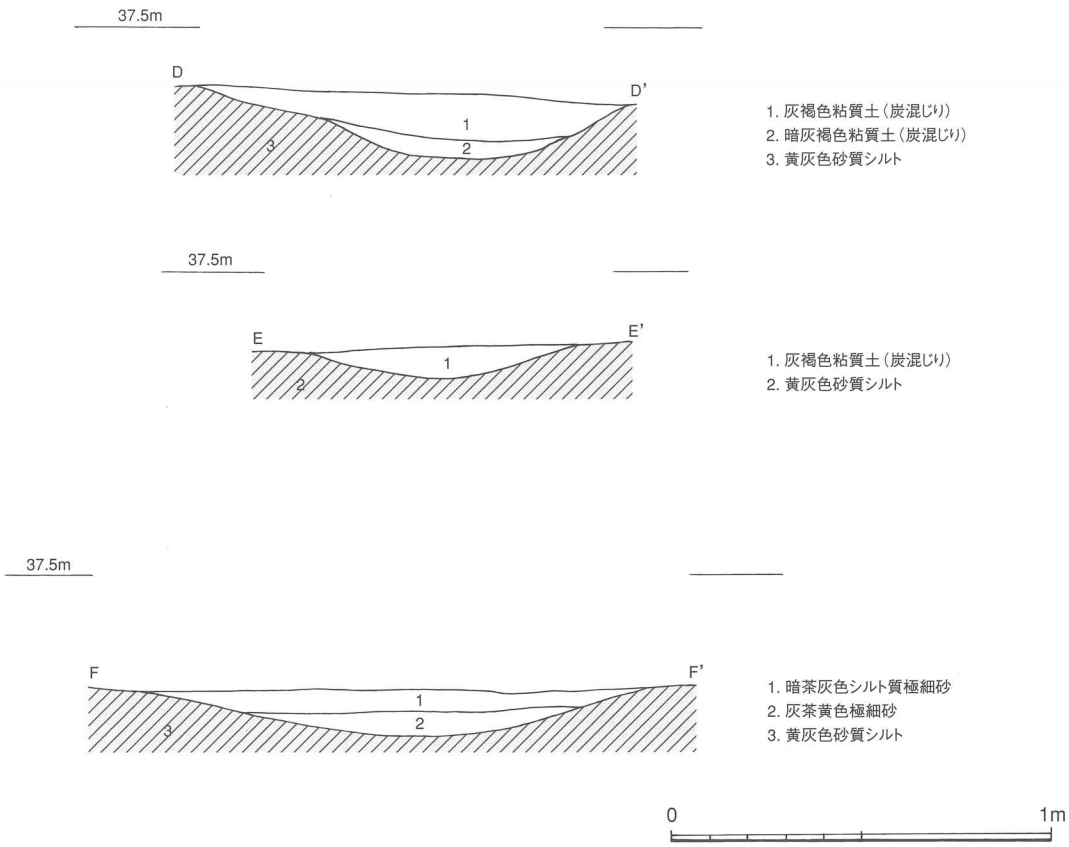


fig.30　5号墳周溝断面図

(5) 中・近世の溝

調査区内で2条確認された。いずれも南北方向に走る溝で、幅約0.2m、深さ0.05m前後である。いずれも暗灰色砂質土が堆積する。耕作地に伴う排水の溝と判断される。この他に犂溝が何条か見つかっている。

第3節　小　結

今回の調査では、古墳3基、中・近世の溝2条を確認した。古墳の墳丘はすべて削平されて、周溝しか残っていないが、方墳および円墳と推定して、ほぼまちがいないと思われる。また、埋葬施設も削平されており明らかでないが、木棺直葬の可能性が高い。周溝内からは、須恵器と若干の埴輪、土師器が出土しているが、これらの年代はおよそ5世紀後半～末頃のものと判断される。

これらの古墳は、これまで付近で発見された水谷大東古墳や、水谷2号墳などとほぼ同時期であり、周辺には同時期の古墳が、未発見の状態で他にも存在するものと推定される。これまでの調査状況から推察して、おそらく付近には、十基以上の古墳がまとまって造られていたのであろう。これらの古墳の被葬者は明らかでないが、これらの古墳の平面的規模や墳形、埴輪の有無等に差異が認められることから、葬られた人たちの間に階層差があったことは明らかである。今のところこの地域の有力者と、その人物に従属する小集団の長というべき人物の墳墓と、推測するのが妥当であると思われる。

第３章　馬掛原遺跡第１次調査

第１節　調査の方法

1. はじめに

調査地は神戸市西区玉津町高津橋に所在する。北東からのびる丘陵上に位置し、調査地付近の現標高は約39mである。北側から西側にかけては櫨谷川の支流である天上川によって深く削られた谷に面する。丘陵の南側にはいくつかの小さな谷状の地形が入り込み、溜池等にその痕跡を留める。調査区の周辺は耕地として利用され、現状では広い範囲で平坦な地形に姿を変えているものと思われる。

今回の調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが、都市計画道路出合新方線築造工事を契機とし、平成15年７月に当該地区に６ヵ所のトレンチを設定して試掘調査を実施した。結果、２ヵ所のトレンチで弥生時代後期の土器片を含む溝あるいは土坑と思われる遺構を確認し、その他２ヵ所のトレンチでは柱穴が確認され、耕地造成等により遺構面が既に削平されていた部分を除いた約1,000㎡を対象として発掘調査を実施するに至った。㈶神戸市都市整備公社より発掘調査依頼書の提出を受けるとともに遺跡の名称について検討を行い、付近にあった小字名を冠して「馬掛原(うまかけはら)遺跡」と命名した。近年、周辺は区画整理、宅地化が進む、消え行く地名の保存もまた重要なことと考え小字名の使用に至った。

2. 調査の方法

調査区内は、厚さ20cmの耕土層直下で明黄色粘質土の基盤層となり、この面で遺構の検出を行った。包含層は存在せず、遺物は遺構に含まれる遺物の他は後世の耕作痕に混入するもののみである。

調査区内に農道が通るため、これを残し調査区を設定した。調査は南側より耕作土を重機により除去し、調査区北端の路線敷外側に仮置きし、掘削残土はこれと混じらぬよう北端路線敷内の調査対象外の部分に積み上げた。遺構面上には耕運機のタイヤ痕や鋤溝が刻まれ、非常に土壌化また硬化が顕著なことから若干表層を削りながら、以下は人力により遺構の検出及び掘削作業を実施した。

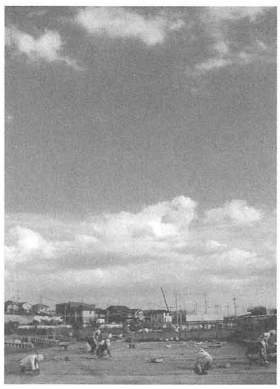


fig.31　調査風景

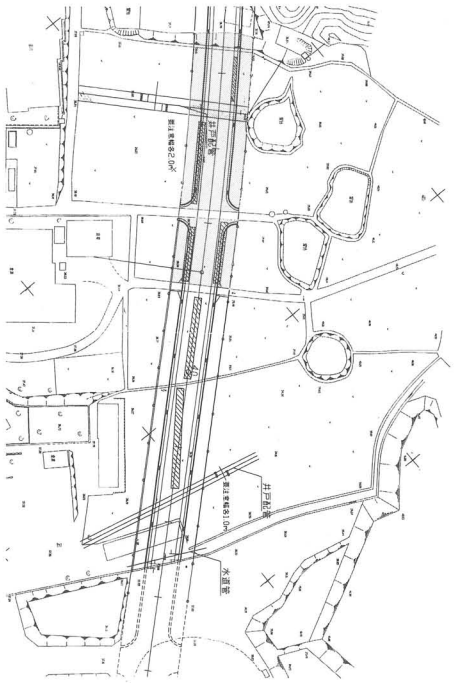


fig.32　調査範囲図(1/2,000)

第２節　調査成果

今回の調査では溝（溝状遺構）、土坑、柱穴、掘立柱建物、柵列をはじめとする遺構を検出した。遺構の位置については掘り残した農道の北側をＡ区、南側をＢ区と適宜称して記述する。

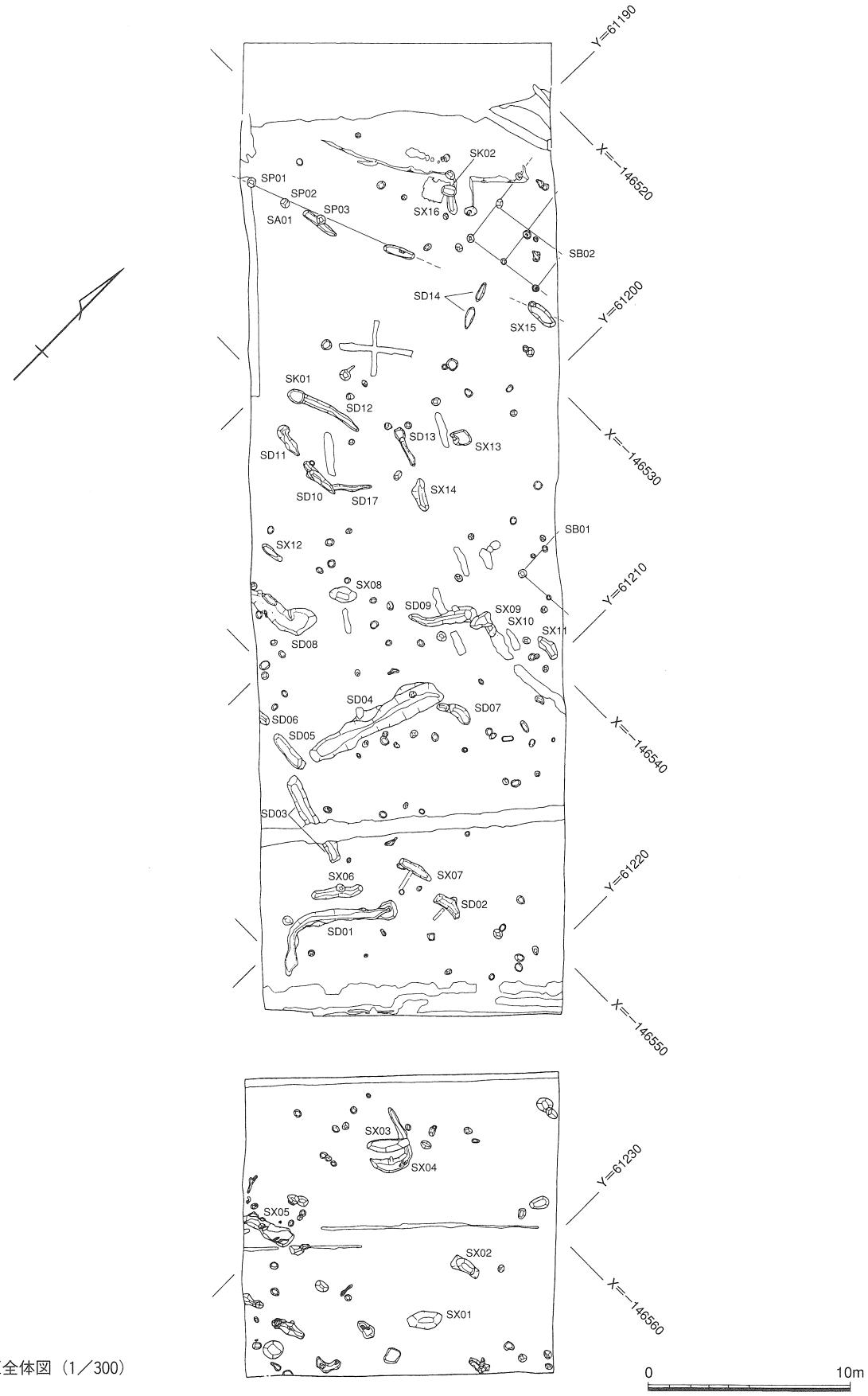


fig.33　調査区全体図（1／300）

溝

今回の調査では溝（状遺構）を多く検出した。直線的な溝の他に平面形がＬ字状を呈するものや折れ部を持つ不定形なものがあり、方形の区画を形成する一群が存在する。主なものはＳＤ01～08である。

ＳＤ01

Ａ区南端で検出した平面Ｌ字状を呈する溝である。検出長は西辺が約2.5m、北辺は約５ｍである。後世の耕作により肩部の形状はやや曖昧となっているが、溝の幅は残りのよい部分で約60cmを測る。辛うじて深さ約10cmが遺存する。埋土は灰色系シルト層及び砂層で、西辺の南端と北辺の中央部から東端にかけての溝底２ヵ所に土器の集中する部分があるが、いずれの土器も非常に残りが悪い。現地での観察及び遺物整理段階でも接合する土器に乏しい。

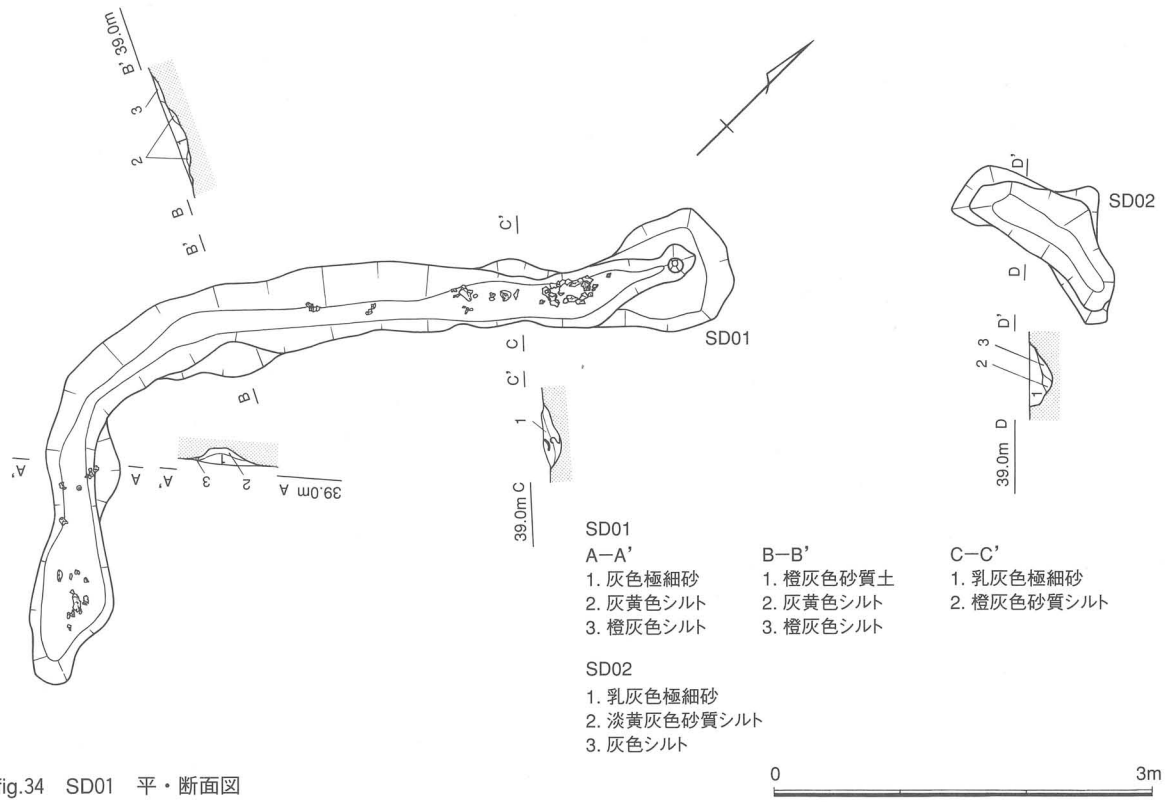


fig.34　SD01　平・断面図

28は北辺の土器群のもので、２条／cmの粗い右上がりの叩き痕の残る甕の底部片である。同一個体と思われる胴部片もあるが接合はしない。29は径１cmの円形浮文を貼り付けた破片である。上下両端面と内面の接合痕から高杯、あるいは器台の装飾部の破片と思われるが小片のため不明である。但し、精良な胎土で成形も非常に丁寧である。30は高杯の脚部で中空の脚部上端を丸くおさめる。裾部を失い、また全体に磨耗がひどく内面にわずかに絞り痕がみられるのみで、接合する杯部もなく全体の形状は不明である。

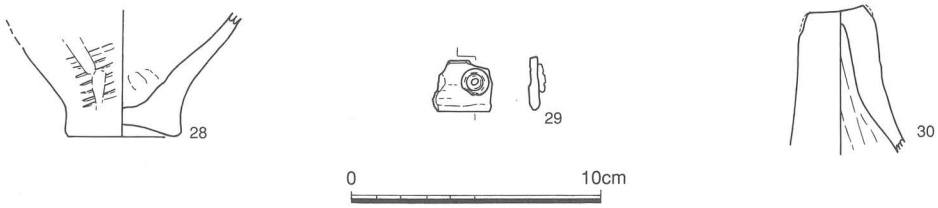


fig.35　SD01　出土遺物

ＳＤ02

ＳＤ01の東側で検出したＳＤ01と直交する南北方向の短い溝である。溝間は約1.7ｍで、深さは最も深い部分で約20cmを測る。埋土は基盤層に近い淡乳褐色粘質土でＳＤ01とは異なる。遺物は出土していない。

ＳＤ03

ＳＤ01の西側で検出した東西方向の溝である。検出長は約５ｍだが撹乱により途中の１ｍを欠く。幅約80cmで、深さ約10cmが残るのみである。土器は溝内の両端にかたまっていたが、遺存状況はいずれも悪い。

図化できた31は細頸壺の頸部である。口径12.8cm、残存高15cmである。口縁部は緩やかに外反し、口縁端には３条の沈線を施した痕跡が残る。

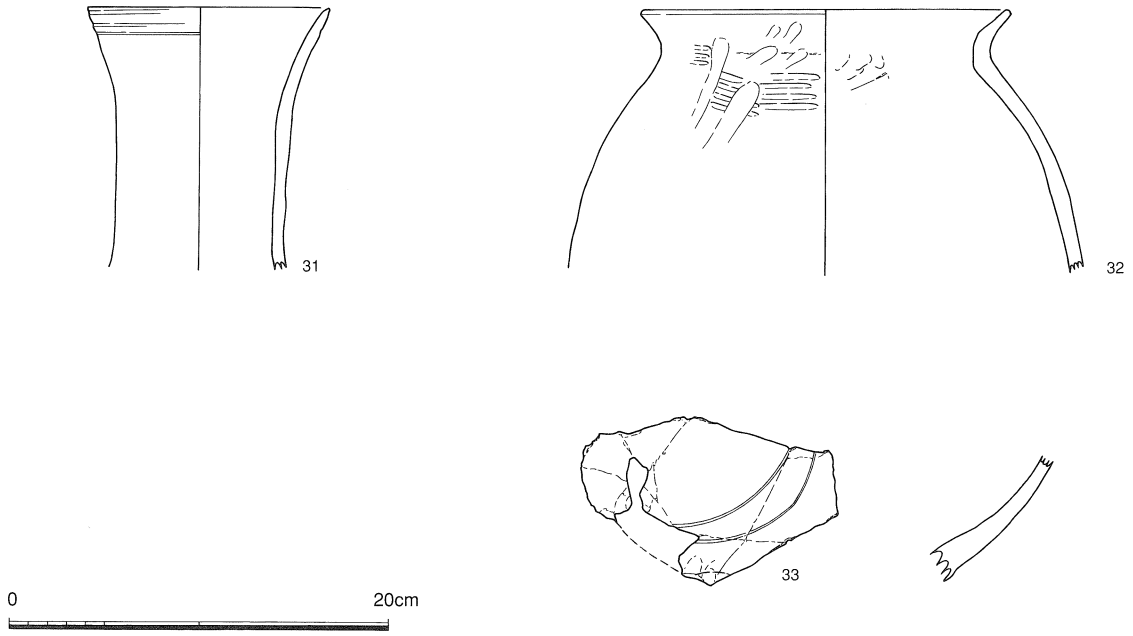


fig.36　SD03・04　出土遺物

ＳＤ04

ＳＤ03と直交する長さ約７ｍの南北方向の溝である。ＳＤ03との溝間は約１ｍを測る。他の溝に比べると比較的残りはよいが、深さは約20cmが遺存していたにすぎない。幅は約１～1.2m、北端で最大幅約1.5ｍを測る。出土土器は少量かつ小片で、溝の中央と東端からわずかに出土したのみである。

図化できた32・33は同一個体と考えられる甕の破片であるが、胴部の大半を欠くため等不明な部分が多い。

32は復元径19.8cmの体部上半の破片で、口縁部は短く外反し、外側に面をもつ。３条／cmの粗い平行叩きと、ナデ消しの痕跡がわずかに確認できる。33は底部の屈曲がわずかに確認できる破片である。非常に丁寧なナデによる仕上げが施され、細かい砂粒を胎土に含む精良な土器である。胴部下半、底部からの立ち上がりすぐの部分にヘラ状工具による２条の線刻がある。平行して緩やかに孤を描くが、右側の線刻は下方で左側の線刻に接するようにやや角度を変えている。

ＳＤ05・06・07・08

ＳＤ03とＳＤ04の間には西にのびる長さ約２ｍのＳＤ05、調査区外にのびるＳＤ06の２本の溝が続き、ＳＤ04の北端には浅い土坑状のＳＤ07が続く。これらの溝は幅50～60cm、深さ10～20cmで前述の溝に比べ規模は小さい。ＳＤ08は緩やかな屈曲部をもつ溝である。出土遺物はごく少量で遺構の時期は不明である。

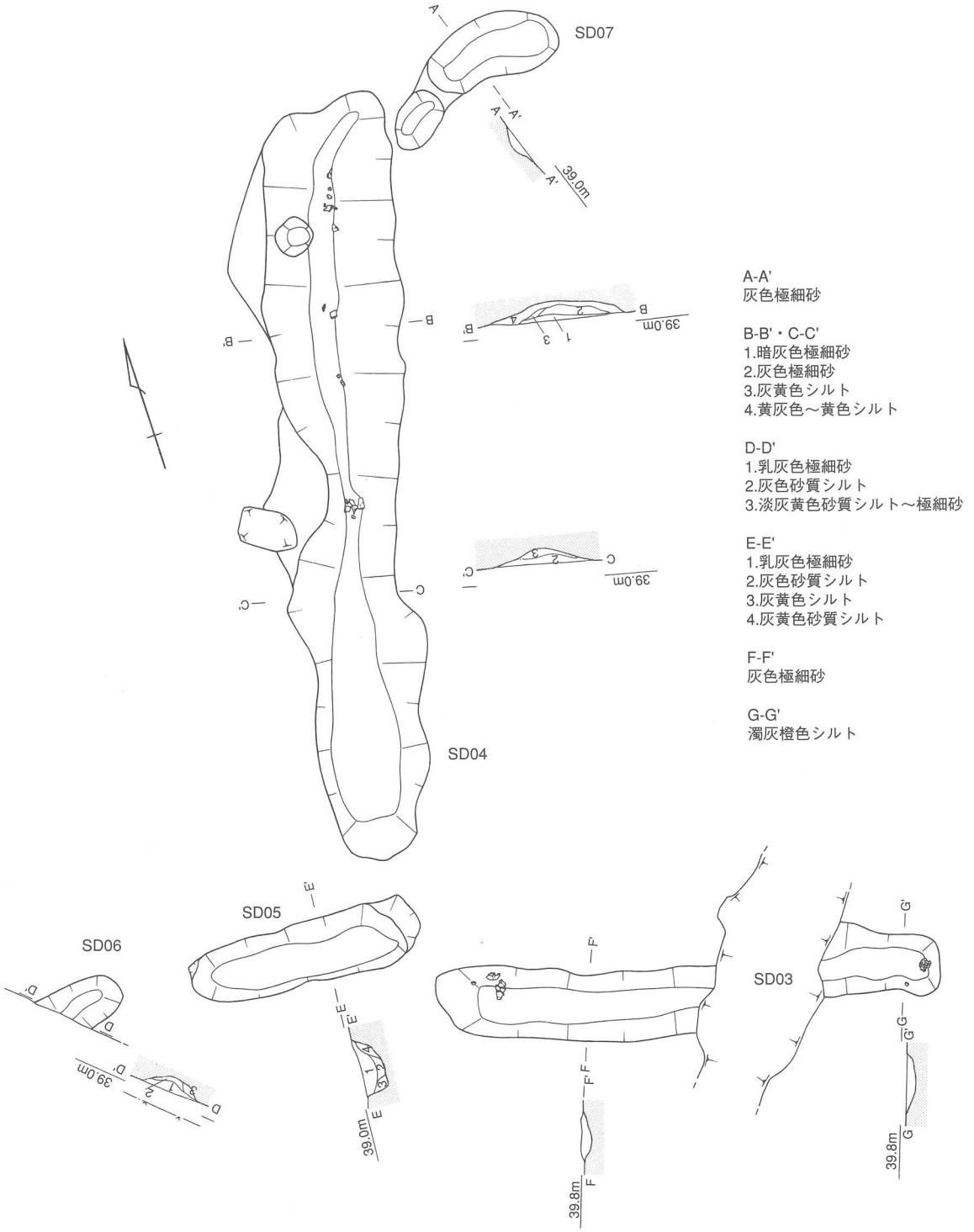


fig.37　SD03 ～ 07　平・断面図

ＳＸ04・05

Ｂ区で検出したＳＸ04・05も平面形がＬ字状を呈する。ＳＸ04は北辺の検出長約2.5m、南側に緩やかに曲がり、約２ｍで浅くなり消滅する。溝の幅は北辺が約30cm、東辺は最大幅80cmと浅く広い形状を呈する。北辺中央から土器が出土したが非常に残りが悪く、土器の形態、時期等は不詳といわざるを得ない。

ＳＸ05はＢ区中央西端で検出した溝である。検出長約2.5m、調査区の西端で細く途切れるような形状となるが、調査区外にのびる可能性が高い。全体の規模、形状については不明である。幅は南端の細い部分で約30cm、北端では約１ｍと歪である。溝中央の最深部で深さ20cmを測り、両端に向かい徐々に浅くなる。溝底には杭状の凹凸部があるが、用途は不明である。遺物は出土していない。

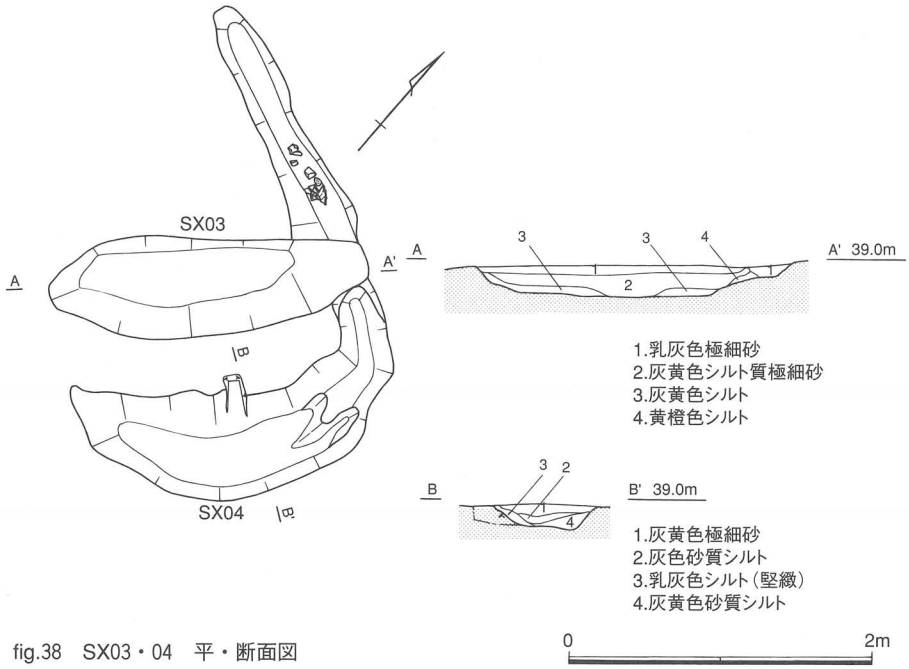


fig.38　SX03・04　平・断面図

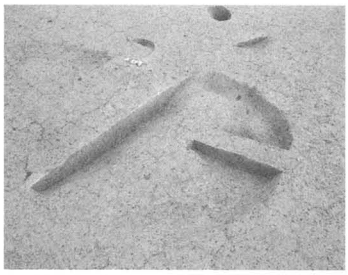


fig.39　SX03・04　土層断面（南から）

fig.40　SX04　遺物出土状況（東から）

土坑

平面形が長方形、あるいは短い溝状を呈する土坑が数基確認された。

ＳＸ01は長辺1.7m、短辺90cmのやや楕円形に近い平面形をもつ土坑である。深さは30cmである。

ＳＸ02は長辺1.5m、短辺40cm、深さ20cmの土坑である。肩部は緩やかに下がった後、落ち込む。

ＳＸ03は長辺2.1m、短辺60cm、深さ20cmの土坑でＳＸ04を切り込む遺構である。埋土はその他の土坑も含めて灰色～黄灰色系のシルト層及び砂層で、いずれも遺物の出土はなかった。

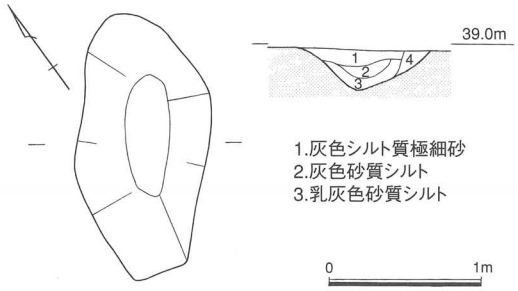


fig.41　SX01　平・断面図

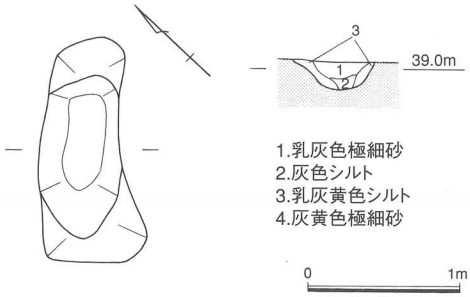


fig.42　SX02　平・断面図

柱穴

調査区全体で約100基の柱穴を検出した。このうち建物として２棟、柵列１条が復元できた。

ＳＢ01

Ａ区中央部東端で検出した建物である。東西、南北それぞれ１間分の柱間を検出したのみで、調査区外、東に広がる可能性が高い。柱間は約1.5ｍで、柱穴掘形の径は約25㎝、柱痕の径10㎝を測る。深さ約30㎝である。ＳＰ101・102より小片ではあるが遺物が出土しており、弥生時代の建物と考えられる。

ＳＢ02

Ａ区北東端で検出した建物である。南北２間 × 東西２間を検出した。柱間は２ｍを測る。柱穴の径は20～30㎝で、深さは約20㎝、柱穴掘形底に径約10㎝でさらに窪む痕跡が認められる。遺物は出土していない。

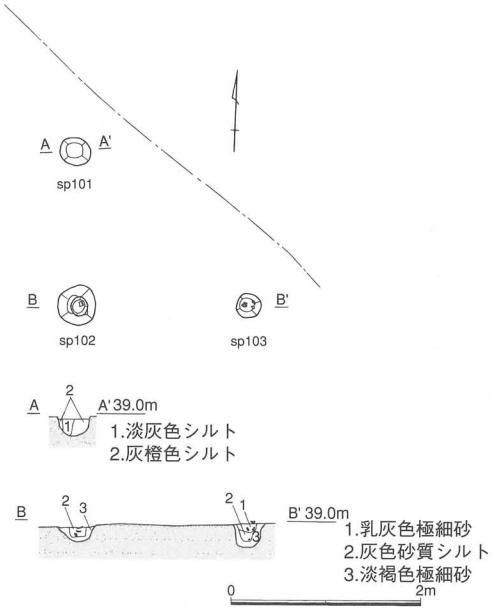


fig.43　SB01　平・断面図

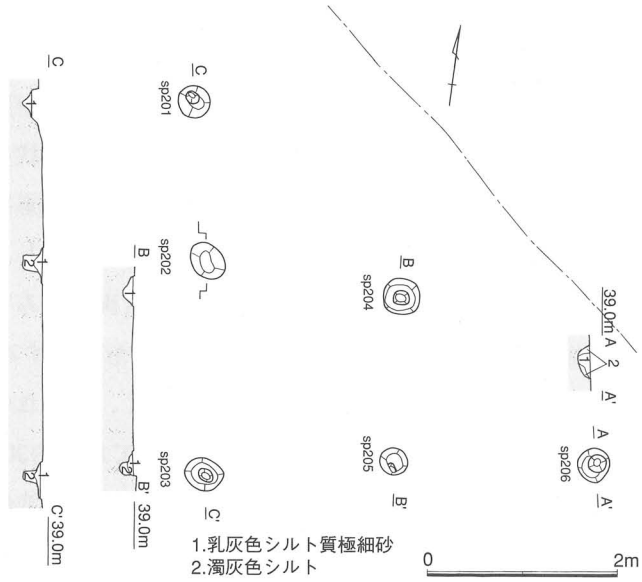


fig.45　SB02　平・断面図

fig.44　SB01（南から）

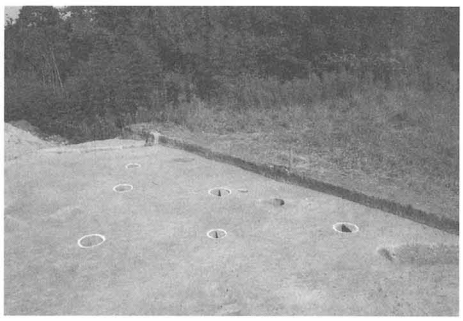


fig.46　SB02（南から）

ＳＡ01

調査区北端近くで検出した柱列である。柱穴は西側で３基確認されたのみだが、東側に長さ２ｍ前後、幅20㎝程の小規模な溝が切れ切れに続いており、一連の遺構かと推測される。谷に面する丘陵縁部、またＳＢ02に近接することから何らかの区画を形成していたものと思われるが、遺物も全く出土しておらず、時期とともに不明な点が多い。

その他、Ａ区北半を中心に幅10～20㎝の小規模な溝を多く検出し、周辺の柱穴の配置等と合わせ、平地式住居等の痕跡であることも考えたが、溝、柱穴から遺物は全く出土せず、その性格は不明である。

第3節　小　結

今回の馬掛原遺跡第１次調査の成果について簡単にまとめておきたいと思う。

まず調査地は比較的幅広の丘陵端部に位置するものの、後世の耕地造成や耕作に伴う地形改変が大きく、旧地形をほとんど留めていないものと考えられる。この点が検出遺構の全容が不明瞭なことの大きな要因となっている。遺構・遺物の残存状況は非常に悪く、遺構の大半が削平を受けた状況で検出された。

その中で方形の区画を形成する溝（状遺構）を検出、特に調査区中央部で検出したＳＤ01・03・04の配置や形状、規模、そして立地の点からこれらの溝で区画された範囲は、上部構造は判らないものの「周溝墓」または「台状墓」状遺構（以下「区画墓」と呼ぶ）と呼べるもので、墳墓の痕跡と考えられる。埋葬施設の検出は叶わなかったが、当地域に墓域が展開することが予測される。出土した遺物は少ないもののＳＤ01・03・04は弥生時代後期後半～末期の所産と考えられ、当該時期に丘陵上に築造された墳墓群と想定できる。

区画墓の規模はＳＤ04が最も長く検出長約７ｍを測り、ＳＤ04と直交するＳＤ03とで形成される一辺８ｍに復元できる。またＳＤ01と東にのびる弧状のＳＤ02が同一の区画を形成すると考えれば、同様に一辺８ｍ前後の規模に復元できる。この他にＳＸ04・05のＬ字状を呈する落ち込みを隅部と想定した区画も一辺８ｍ前後に復元でき、調査区内に少なくとも２～３基の同規模の区画墓が存在していたと推測できる。ＳＤ01・03の状況からは南北方向の溝が一辺８ｍで長辺を形成し、東西方向の溝はその半分の３～４ｍで、現状では長方形を呈するものかと推測される。中央の区画墓のみやや主軸方向を異にする。区画墓の周囲では長辺約1.5m、短辺約80cmのＳＸ01・02等の平面長方形を呈する土坑が確認され、区画に付帯する土坑墓の痕跡とも考えたが、積極的に肯定できるものではなく、いずれの検出遺構は多分に推測を含むものであった。

周辺の同時期の遺跡を概観すると、谷を隔てた南約300mの標高34～36mの丘陵突端部には、弥生時代後期後半～末の竪穴住居８棟が検出された高津橋大塚遺跡が立地する。また丘陵南裾部から沖積地上にかけては白水遺跡・今池尻遺跡・新方遺跡といった集落遺跡が存在し、同時期の竪穴住居をはじめとする遺構が検出されている。これら沖積地上の遺跡と調査地の位置する丘陵上との比高差は20m前後を測る。

馬掛原遺跡の全容は明らかでないが、仮に造墓集団について考えた場合、立地、時期的に近接する高津橋大塚遺跡に属する可能性が高いものと思われる。但し、大塚遺跡は短期間で終息しており、沖積部からの一時的な移動と推測されることから現段階では沖積部の集落動向と合わせ明確にできない。

調査地を含む広大な沖積平野を見渡す一連の丘陵上には明石川及び伊川流域の弥生時代後期～古墳時代前期にかけての首長層の墳墓の変遷を考える上で重要な天王山４・５号墳等の一連の墳墓群、全長70mの前方後円墳である白水瓢塚古墳が築かれ、営々と墳墓を築く地域に含まれる点が特筆される。

今回の調査は弥生時代～古墳時代にかけての当地域における造墓活動を考える上では勿論、当地域の集落形成、支配者層の動向を考える上でも重要な成果であろう。

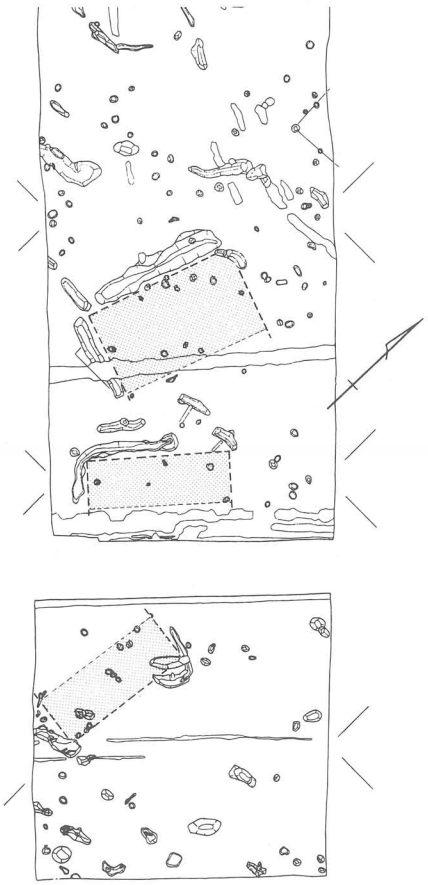


fig.47　区画墓推定図（1／400）

（参考文献）　『白水遺跡第３・６・７次・高津橋大塚遺跡第１・２次発掘調査報告書』2000　神戸市教育委員会

第4章　まとめ

第1節　明石川流域における古墳時代後期の古墳群について

1. 水谷古墳群

第2章において今回確認された古墳の概略を記したが、この項では、これまでの調査で確認された古墳を含めて述べてみたい。

これまで水谷地区で発見された古墳の位置関係はfig.50の通りである。この図を見ると、水谷大東古墳周辺の調査トレンチでは、明確に古墳と判断されるものは確認されていないが、報告の中では、古墳時代の土器が出土する弧状の溝の一部を検出しており、これが古墳の周溝である可能性は否定できない。しかし、この古墳周辺に密集して多数の古墳が存在したとは考えにくく、むしろ、2～5号墳の辺りに、高密度で古墳が分布しているように見受けられる。

各古墳の諸元はfig.48のようになっている。これを見ると、(1)墳形の相違、(2)墳丘規模の相違、(3)埴輪の樹立の有無など明瞭に差異が認められる。古墳の築造された時期は出土した遺物からみて、水谷大東古墳と水谷2号墳が5世紀後半、3、4、5号墳が5世紀末～6世紀初頭と考えられる。水谷古墳群は概ね、5世紀後半から6世紀初頭の時期に築造された古墳群と考えて大過ないと思われる。

古墳の名称・番号	墳　形	墳丘規模	周　溝	埴　輪	出土遺物	参　考　文　献
水谷大東古墳(水谷1号墳)	帆立貝形	全長約20m、円丘部直径約15m、造り出し部長さ約5m、最大幅約5.5m	幅約3～4m、馬蹄形	円筒埴輪、形象埴輪(鶏形・人物・楯形)	須恵器、碧玉製管玉	「水谷大東古墳」平成8年度神戸市埋蔵文化財年報　神戸市教育委員会　1999
水谷2号墳	方・または帆立貝形	東西辺11.5m	幅約3.5～4.3m	円筒埴輪、形象埴輪(馬形・盾形・人物・靫形)川西編年Ⅳ期	須恵器(樽形瓶)	「水谷遺跡第7次調査」平成10年度神戸市埋蔵文化財年報　神戸市教育委員会　2001
水谷3号墳	円	直径約10m	幅約2～4m	—	須恵器	本書掲載
水谷4号墳	方	一辺8m	幅約2～2.5m	円筒埴輪、形象埴輪(人物)少量出土	須恵器(樽形瓶)	本書掲載
水谷5号墳	方	8.5×6.5m	幅約1m前後	円筒埴輪ごく少量出土	—	本書掲載
南山神古墳	—	—	—	円筒埴輪	—	本書に出土埴輪実測図掲載

fig.48　水谷古墳群データ

fig.48に記された南山神古墳は、平成6年の試掘調査で発見された。ここでは周溝状の遺構から埴輪片が出土している。この古墳については水谷古墳群の推定範囲に接しており、同じ古墳群に属するものと判断される。

fig.49は南山神古墳から出土した埴輪である。34のようにやや突出するタガを持つものや、35のように幅広の低い台形上のタガを貼り付けるものが認められる。外面にはわずかにハケ目調整が残存し、内面には指頭圧痕が見られる。35には円形の透かしの一部が残る。いずれも、黄白色を呈し、焼成状態は悪い。

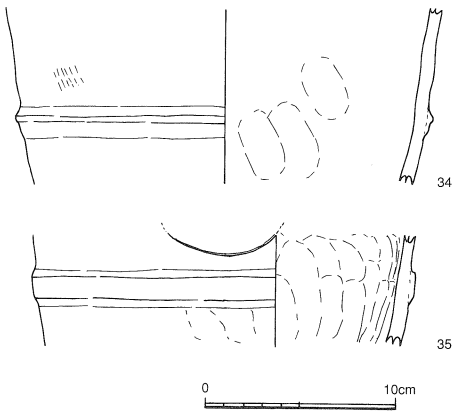


fig.49　南山神古墳　出土埴輪

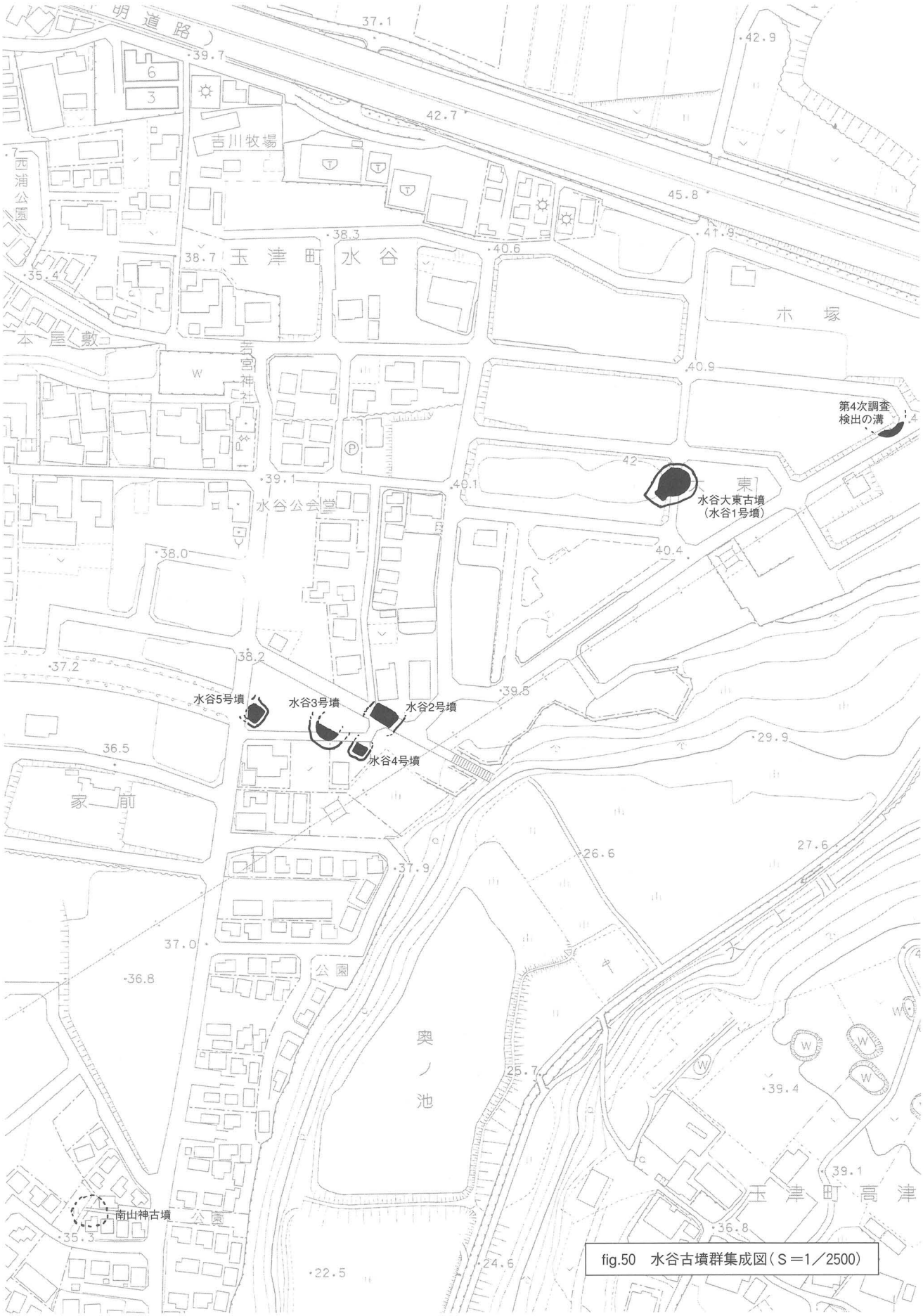


fig.50　水谷古墳群集成図（S＝1／2500）

以下で、水谷古墳群の特徴を述べておきたい。

(1) 墳形：帆立貝形（水谷大東古墳）、方墳（水谷２、４、５号墳）、円墳（水谷３号墳）などがある。

(2) 墳丘規模：全長20mの水谷大東古墳と直径・一辺10m前後のもの（水谷２～５号墳）に大別される。

(3) 埴輪の樹立の有無：水谷大東古墳は、周溝外側に埴輪列が検出された。また周溝内から、多くの円筒・形象埴輪が出土した。水谷２号墳も周溝内から複数の形象埴輪が発見され、墳丘上に樹立していたと推定される。３号墳では埴輪は全く出土せず、埴輪の樹立していた可能性は低い。また、４・５号墳ではごく少量しか出土しなかった。これらの埴輪は、周辺の古墳からの流れ込みか、または古墳墳丘に少数の埴輪が樹立されていたと思われる。

このような差異が何を表わすかについては、意見が分かれるところであろうが、当時の階層差を反映するものと解釈するのが妥当であろうと考えられる。

水谷古墳群では、すべての古墳を調査していないので断定はできないが、水谷大東古墳の築造を契機として、２号墳以下の古墳が順次造られたと考えられる。古墳の築造期間は、先述の通り５世紀後半から６世紀初頭ごろまでの比較的短い間のようである。水谷大東古墳の被葬者とその他の古墳に葬られた人との関係は、明確ではないが、この地域（明石川の支流である伊川下流域）の小首長と、それを支える集団の主だった人々の墳墓であるとみるのが妥当であろう。

2. 明石川流域の後期前半の古墳と集落址

明石川流域の前期の古墳は、伊川流域の天王山４・５号墳[1]、明石川中流域の堅田神社１号墳[2]などが代表的で、古墳の数はきわめて少ない。これらはすべて方墳または長方墳で、前方後円墳は確認されていない。

前期末～中期初めに、伊川流域には瓢塚古墳[3]が出現する。これは全長約57m、後円部径33m、前方部長28mの前方後円墳で、断面楕円形の埴輪列が並ぶ。平成15年度の発掘調査では粘土槨の主体部から碧玉製車輪石、石釧や画文帯神獣鏡、鉄剣、ガラス玉等が出土した。

中期前半には、明石川下流域に王塚古墳[4]（全長74m、後円部径44m、前方部前端幅42m、鍵穴形の周濠を持つ）が築造される。明石川上流域にあたる神出町の金棒池古墳[5]（１号墳）は前方後円墳といわれているが、土取りによって損壊されており、時期などの詳細は不明である。

明石川流域で、古墳が著しく増加するのは、古墳時代後期初め頃（５世紀末～６世紀初頭）である。この段階で流域各地に直径10m内外の円墳が、主に丘陵・段丘上に築造される[6]。

これらの古墳の内部主体は木棺直葬で、周溝、墳丘裾または、主体部内に土器、ガラス系の装身具、鉄製品（鉄鏃、鉄刀）を副葬するものが多いが、甲冑を埋納するもの[7]は１例を除いてない。古墳の時期は出土した須恵器からみて、田辺編年[8]のＴＫ23～47、ＭＴ15、ＴＫ10型式の段階を中心に営まれるようである。

また、この時期に明石川流域では前方後円墳は築造されないが、円形の墳丘に短い造出しが付属する帆立貝形古墳[9]が数ヵ所で確認されている。これらは、明石川中・下流域および伊川流域で発見され、現在の段階では、明石川上流域、櫨谷川流域では確認されていない。これらの帆立貝形古墳の概要はfig.51のとおりである。

古墳の名称	所在地	全長(m)	円丘部直径(m)	造出長さ(m)	造出幅(m)	周溝	埋葬施設	出土遺物	時期
水谷大東古墳	西区水谷	20.5	15	5	6	馬蹄形	不明	須恵器・埴輪	5世紀末～6世紀初
天王山３号墳	西区天王山	25	20	5	10	一部あり	木棺直葬？	〃	〃
出合亀塚古墳	西区中野	29	20	9	13.4	馬蹄形	不明	〃	〃
中村５号墳	西区平野町印路	16.3	14	2.3	4.7	－	木棺直葬2基	〃	〃

水谷大東古墳現地説明会資料(1996.5.19)掲載の表より数値引用

fig.51　明石川流域の帆立貝形古墳一覧表

fig.52は古墳時代後期前半頃（5世紀末～6世紀前半）と考えられるＴＫ23～47、ＭＴ15型式の段階（一部ＴＫ10を含む）の遺物が出土、または採集された古墳・古墳群（黒丸または鍵穴形の記号）および当該時期の集落（楕円形）を表わしたものである。

流域名	番号	古墳・古墳群名称	記号	遺跡名	流域名	番号	古墳・古墳群名称	記号	遺跡名
明石川上流域	1	押部古墳群	A	栄遺跡	明石川中流域2	16	印路古墳群	F	印路遺跡
〃	2	緑ケ丘古墳群	B	押部遺跡	〃	17	下大谷古墳群	G	玉津田中遺跡
〃	3	〃	C	福住遺跡	〃	18	中村古墳群		
〃	4	日吉谷古墳群	D	西盛南遺跡	〃	19	慶明寺古墳群		
〃	5	広野古墳群			明石川下流域	20	亀塚古墳	H	出合遺跡
〃	6	道心山古墳群			〃	21	王塚古墳	I	吉田南遺跡
〃	7	金棒池古墳			櫨谷川流域	22	松本古墳	J	西神ニュータウン第62号遺跡
〃	8	新内古墳			〃	23	池谷古墳群	K	栃木遺跡
〃	9	七曲り古墳群			伊川流域	24	水谷古墳群	L	新方遺跡
明石川中流域1	10	西神ニュータウン第18,19,20号墳	E	常本遺跡	〃	25	高津橋大塚古墳	M	白水遺跡
〃	11	堅田神社古墳群			〃	26	瓢塚古墳	N	寒鳳遺跡
〃	12	西神ニュータウン第29～33号墳			〃	27	天王山古墳群	O	上脇遺跡
〃	13	西神ニュータウン第41,42号墳			〃	28	鬼神山古墳群		
〃	14	常本古墳群			〃	29	池ノ内古墳群		
〃	15	保養所裏山古墳群			〃	30	柿谷古墳群		

fig.52　明石川流域の後期前半の古墳と集落址一覧表

分布状況を観ると、これまでの研究成果[10]で既に述べられているように、明石川上流域・中流域・下流域、伊川流域、櫨谷川流域[11]というそれぞれのまとまりに大別ができることは、動かせないものと判断される。以下それぞれのグループの特徴を略述する。

①明石川上流域

押部谷町、神出町から三木市の一部に分布するグループである。丘陵部の古墳群の多くは、過去の団地造成工事によって、消滅しており、詳細は判らないものが多いが、地元の研究者の記録やわずかに残された遺物などによって、木棺直葬墳が多く、埴輪を持つ古墳があるということである。神出町の高位段丘面縁辺部には、既述の前方後円墳といわれている金棒池１号墳や、墳丘は削平されていたが、直径17mの円墳である新内古墳[12]がある。なお、この周溝内からは円筒埴輪、人物埴輪が出土している。

集落址は、河岸段丘上に成立した西盛南[13]、福住[14]、押部[15]の各遺跡で当該時期の遺構、遺物が発見されている。

②明石川中流域１

押部谷町の一部、平野町の北半部に位置するグループである。現在の西神ニュータウン内に存在した古墳群も、その中に含む。今までに確認されている古墳はすべて丘陵上にある。明石川右岸には、常本古墳群[16]や保養所裏山古墳群[17]がある。これらは発掘調査が行われていないため、詳細は不明であるが、埴輪を有する古墳があるようである。左岸には堅田神社古墳群[18]を初めとする西神ニュータウン内の古墳群[19]が１基～６基程度のまとまりを成して尾根上に点在する。直径10m前後の円墳で構成され、ごく一部を除いて埴輪は持たない。

集落遺跡は、発掘調査で確認されているのは、常本遺跡[20]だけであるが、明石川左岸の平野町繁田・堅田、押部谷町養田[21]付近に当該時期の遺跡が存在すると思われる。

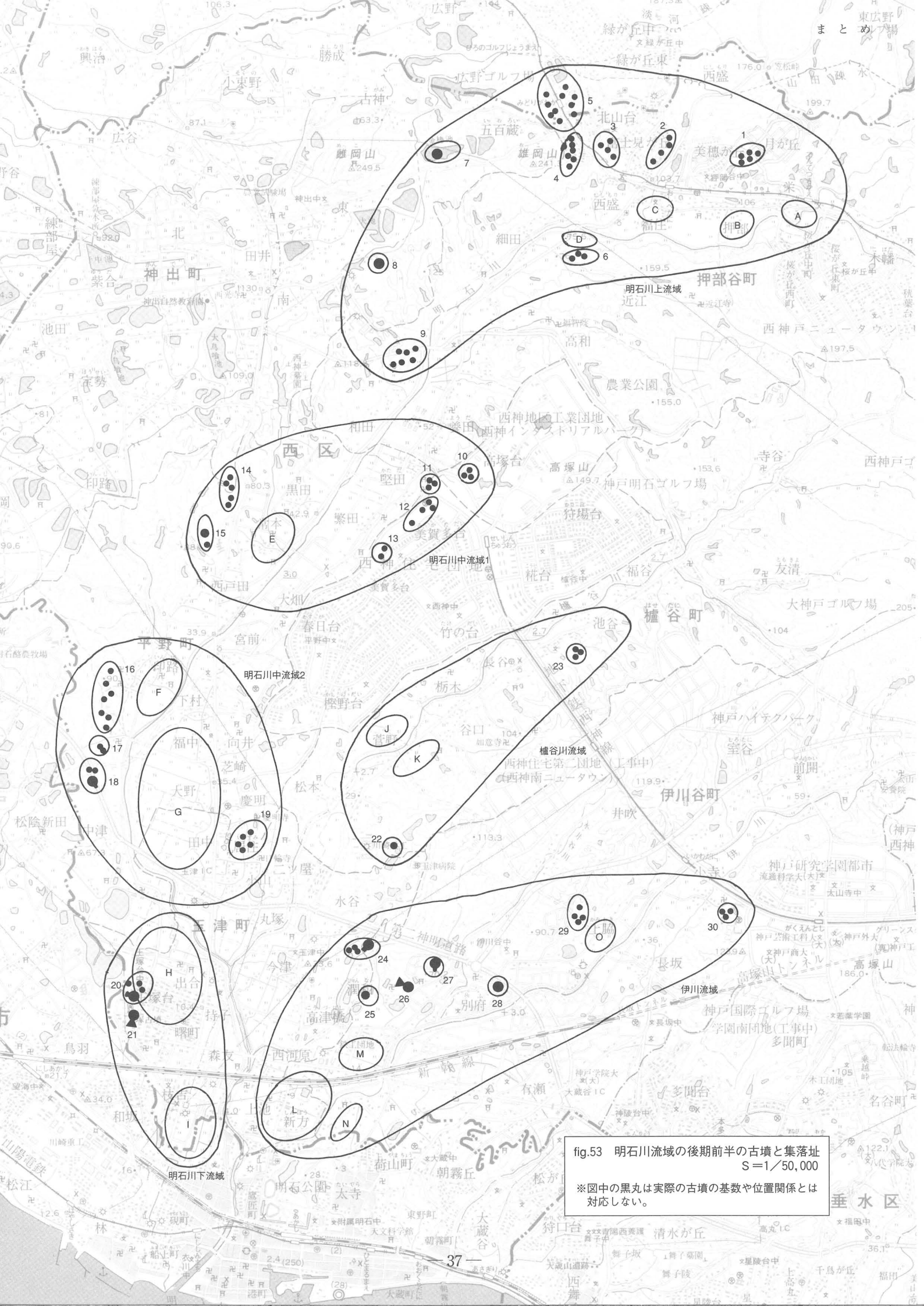


fig.53　明石川流域の後期前半の古墳と集落址
S＝1／50,000

※図中の黒丸は実際の古墳の基数や位置関係とは対応しない。

③明石川中流域２

平野町南部、玉津町の一部を含む地域である。明石川右岸には帆立貝形古墳の中村５号墳[22]が発見されている。また、北側の丘陵上には印路古墳群[23]や、金属製の勾玉が出土した下大谷古墳群[24]がある。左岸には尾根上に慶明寺古墳群、段丘上には、その支群と考えられる居住・小山遺跡内で発見された、墳丘を削平されて周溝のみ残存した古墳[25]などが分布する。

集落址は右岸には韓式系土器が出土した印路遺跡[26]、左岸には、弥生時代から継続的な、拠点的集落のひとつと想定される玉津田中遺跡[27]が占地している。

④明石川下流域

明石川右岸の玉津町南西部の地域である。王塚台には、５世紀前半の前方後円墳である王塚古墳[28]がある。また同じ段丘上からは、墳丘が削平された帆立貝形古墳の亀塚古墳[29]が発見され、さらに周辺からは小規模な方墳・円墳など４基が調査されている。

集落遺跡には、初期須恵器や陶質土器、韓式系土器が多く出土し、渡来系氏族の居住した可能性が高い出合遺跡[30]や弥生時代後期から継続的する集落である吉田南遺跡[31]があり、有力な勢力の存在が想定される。

⑤櫨谷川流域

この地域での古墳の調査例が少なく、その実態は明らかになっていない。埴輪を持つ池谷古墳群[32]、箱式石棺が出土したといわれる松本古墳[33]などが挙げられる。未調査の古墳群もいくつか認められるものの、基数はそれほど多くないと推定される。

集落址は櫨谷川右岸菅野付近には西神第62号遺跡[34]、その対岸の栃木遺跡[35]などで確認されており、中流域の段丘上に集落が営まれていたようである。

⑥伊川流域

伊川右岸の丘陵部には、既述の八禽鏡や箱式石棺を持つ４世紀前半の天王山４、５号墳、明石川流域で初めての前方後円墳とされる瓢塚古墳が築造されるなど、早い時期から有力な古墳が出現する地域である。５世紀後半以降、水谷大東古墳[36]とその周辺の小古墳、天王山３号墳と１・２号墳[37]などといった帆立貝形古墳とそれに伴う小古墳が築かれる。

また、乱掘によって遺物が持ち出され、緊急調査を実施した鬼神山古墳[38]では、２つの棺から出土したと推定される変形獣文鏡、銅釧、杏葉、鏡板、鉄刀、玉類、須恵器などの出土品があり、６世紀初頭のものとやや時期が下るものがある。墳形は明らかではないが、円墳または帆立貝形古墳の可能性が高い。

水谷古墳群が分布する段丘の谷を隔てて、やや南に下がるところには、高津橋大塚古墳[39]がある。この古墳は、後世の開墾などで、墳丘がほとんど削られており墳形は判らないが、礫敷粘土床の主体部からは捩文鏡や滑石製の玉類が発見された。付近の緩斜面からは碧玉製の管玉や円筒・人物・盾形・家型埴輪などの遺物や古墳の周溝の一部を想定させるような溝が確認されている。

伊川を遡った左岸尾根上には、３基の古墳からなる柿谷古墳群[40]があり、その内の１号墳は直径14mの円墳で、埴輪列が確認された。また、形象埴輪も出土している。礫床上の木棺内からは、鉄剣・鉄鏃が発見された。６世紀初頭の古墳であろうと推定される。

明石川と伊川の合流点付近には、弥生時代に前・中期の拠点的集落で、古墳時代中・後期には玉製品を作る工房が存在した新方遺跡[41]、伊川左岸の段丘上に位置する寒鳳(かんぷう)遺跡[42]、水谷古墳群の南１km付近にある白水遺跡[43]、伊川をやや遡った右岸には、上脇遺跡[44]とそれに付随するように丘陵上に立地する池ノ内古墳群[45]などが調査されている。

3. 古墳時代後期前半の小首長墳

前項で述べた、古墳時代後期前半の古墳と集落址の関係でみると、ほぼ集落址と古墳群が対応して形成されており、それぞれの墳墓を造営した集団がそれぞれの集落址の人々であることを、想定することは誤りでないと思われる。

とりわけ、③明石川中流域２、④明石川下流域、⑥伊川流域には帆立貝形古墳が発見されており、その近辺には小古墳群が附属している状況が窺え、これからみて、第１項で述べた墳形や墳丘規模、埴輪の有無などから、これらの古墳の被葬者の間には階層差があると解釈することができる。

一般に畿内では古墳時代中期の段階で、すでに地域の首長の墳墓は前方後円墳ではなく、帆立貝形古墳や方墳、円墳などを営むものが多くなるという[46]。明石川流域では、５世紀前半には、鍵穴形の周濠を持つ前方後円墳である王塚古墳が築かれるが、次代には続かず、しばらくの空白期間の後、５世紀後半から６世紀初頭の段階で明石川流域の各所に帆立貝形古墳が築造され、小型の円・方墳とともに群を構成しているということが明らかになっている。

なぜ、この段階に古墳が激増したのであろうか。それは以下のような想定がなされる。瓢塚古墳や王塚古墳を築き、または葬られた首長たちのように、明石川とその支流域を代表[47]してヤマト政権と取り結び、ごく限られた人物のみ前方後円墳に葬られるということが行われなくなり、流域のいくつかの小首長が、それぞれ個別にヤマト政権と交渉をもった可能性があるということである。５世紀中頃から、ヤマト政権は地域の中小首長と直接的に手を結ぶことを、積極的に推し進める政策[48]を進めたとされており、この政策のあり方は、明石川流域の状況と合致するのではないかと考えている。

しかしそれらの関係は、伊川流域では、水谷大東古墳⇒天王山３号墳⇒鬼神山古墳という小首長墳の順序が追えるのに対し、③明石川中流域２、④明石川下流域では、現在のところ帆立貝形古墳がそれぞれ１基ずつしか確認されていないところからみて、必ずしも持続的なものではない可能性が高い。

以上要約すると、５世紀後半から６世紀初頭の明石川とその支流域には、複数の小首長が存在し、いくつかのムラを統禦していた。それらの小首長が個別的に、ヤマト政権またはそれに直属する人々との関係を持っていたと思われる。その親疎・貢献の程度に応じて、一部の小首長の墳墓に帆立貝形古墳が採用され、渡来系の人々が来住[49]したのであろう。その小首長墳とともに、配下のムラの有力者または小首長の親族[50]が、付近の小規模な円墳・方墳に葬られるようになったと想定するのが妥当と思われる。しかしこれらの古墳群の基数をみても、数基から十数基程度であり、多くの古墳が密集しているようではなく、それほど大きな結集力を持った集団を想定することは難しいと判断される。

4. 住吉宮町古墳群との比較

５世紀後半～６世紀前半頃の古墳群としては、六甲山南麓に位置する神戸市東灘区に、住吉宮町古墳群が存在する。その特徴を既刊の報告書[51]を基に要約すると、以下のとおりである。

①この古墳群は扇状地末端の微高地上に立地し、元住吉神社付近を中心とする東西600m、南北250mの範囲に分布する。

②これまでに70基以上の古墳が発見されており、全長推定57mの前方後円墳とされる坊ヶ塚古墳と全長23mの住吉東古墳を中心に、一辺２～20mの方墳群と、低いマウンドまたは墳丘を持たない箱式石棺墓群から構成される。時期は田辺編年のＴＫ208～ＴＫ10型式（５世紀中頃～６世紀中頃）の須恵器が出土するが築造のピークはＴＫ23～ＴＫ47ぐらいの時期（５世紀後半～末）である。

③一辺10m前後の方墳が最も多い。規模の大きなものほど古く、新しくなると縮小する傾向がある。

④後世に埋葬施設が削平されているものも多いが、木棺墓、箱式石棺墓、土器棺墓が確認されている。埋葬施設の中には鉄剣・鉄刀・鉄鏃などが収められているものが多い。

⑤外部施設としては、墳丘コーナーに葺石、または大き目の石を並べる隅石を施すものや、墳丘平坦面の縁辺部に沿って列石を行うことが特徴的である。

⑥埴輪を持つ古墳は少なく、形象埴輪を持つものも限定されている。川西編年のＶ期のものが多い。

共伴する須恵器は、ＴＫ23型式の新しい段階までである。

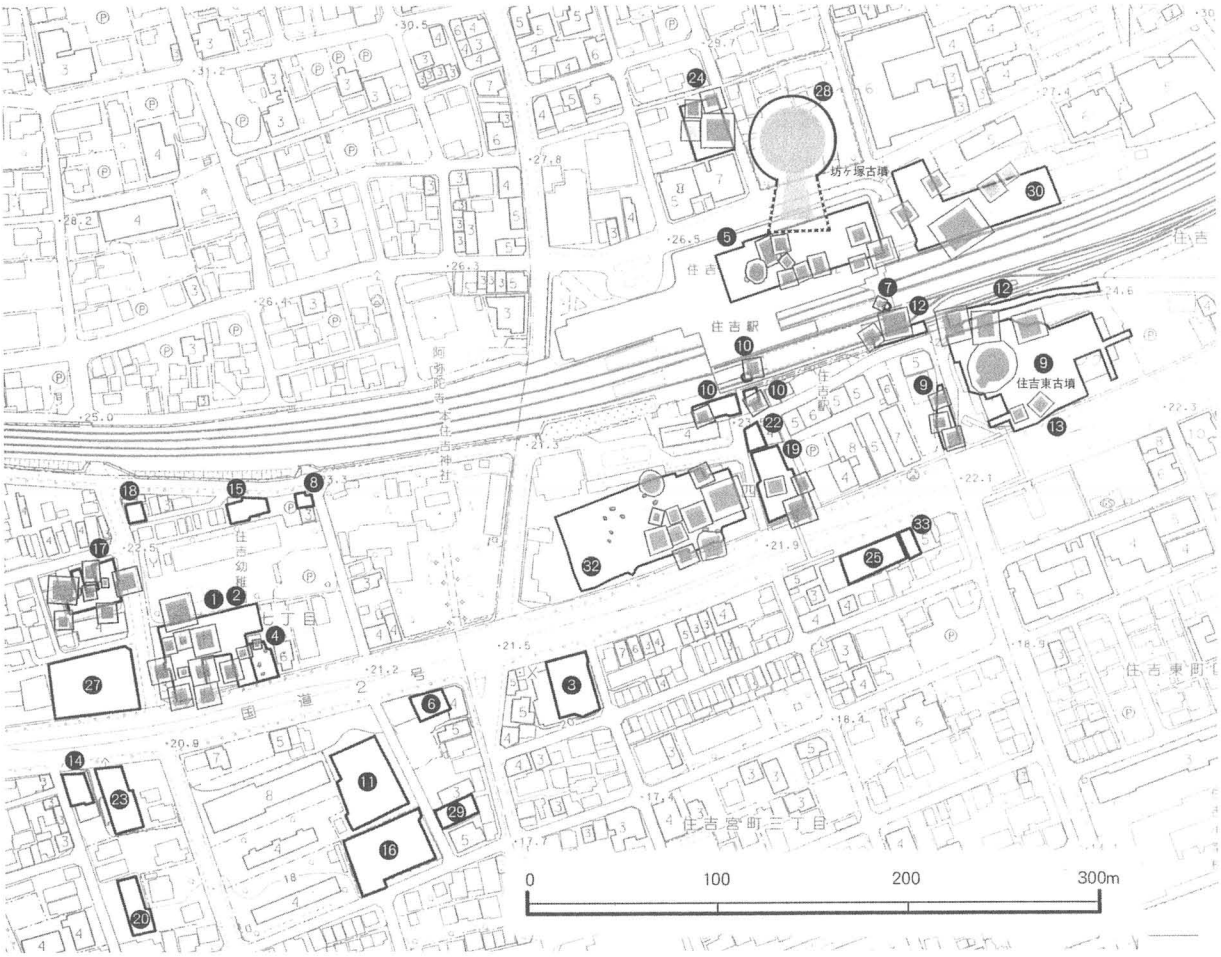


fig.54　住吉宮町古墳群全体図（参考文献 51 より引用）

以上を明石川流域の古墳群と比較してみて、明確に違うのは、その発見された基数と密度、立地である。また、前方後円墳、帆立貝形古墳、方墳という墳形の多様性[52]、また、小型の古墳のすべてが方墳であるという規格性などがあげられる。これらの点から、住吉宮町古墳群の首長墓のもとに結集され、葬られた人の多さ、言い換えれば、首長の勢力規模の大小が自然と浮かび上がると言えよう。

同様の古墳群は、大阪市長原古墳群[53]のように河内平野にも見られる。この古墳群は、大陸の先進的な生産技術をもって、あるいは原初的な官僚として、ヤマト政権と深く結びついた集団の墳墓[54]群と解釈されている。

住吉宮町古墳群の被葬者達は、ヤマト政権とどのような関わり方をしていたかは不明であるが、長原古墳群の被葬者たちと同様に、大王またはそれに直属する集団と密接な関係にあったことは想定できる。

以上から、明石川流域の古墳群については、六甲山南麓に位置する住吉宮町古墳群と比較して、一群あたりの基数が少なく小規模であり、また流域各所に分散することなどから、墳墓を紐帯とする結合の範囲は六甲山南麓と比較して狭小であり、大きな結集力を持った集団は想定しづらいと言わざるを得ない。

第2節　終わりに

段丘上の畑の下から、墳丘が完全に削平された古墳が発見されて10年近くが経過し、水谷遺跡の調査も、10次を数えることができた。その間に古墳は5基が発見され、まだ古墳群の全容は判らないが、その輪郭はおぼろげながらも次第に明らかになりつつある。

また、この報告書ではこれまでの明石川流域で調査された結果を踏まえて、古墳時代後期前半の古墳群と遺跡の分布状況をみて、流域全体にある程度のまとまりを持ちながら分散していることを確認し、さらに神戸市東灘区の住吉宮町古墳群と比較することで、それぞれの特徴を指摘した。

しかし、限られた紙数でそれらの比較検討を行ったため、各古墳群の細かい説明を欠くなど、充分な論証を行うことができなかった部分が多い。今回提示したいくつかの点は、今後も検討の課題としてゆきたい。

また、馬掛原遺跡という新発見の遺跡もこの報文に載せることができた。後世に削平されて遺存状態はよくないが、弥生時代の区画墓を確認した。今後、この地域の弥生時代の墓制を考える上での貴重な資料を提示したといえる。

伊川流域は、遺跡・古墳ともに注目すべきもの多く、明石川流域の歴史を考える上で、非常に重要な場所であることを挙げて結びの言葉としたい。

参考文献・註

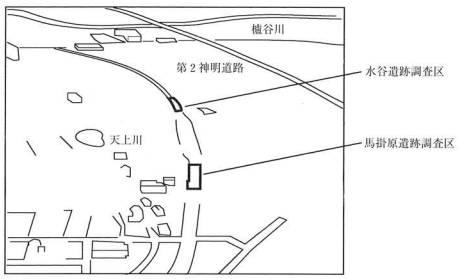
(1)本報告書6頁F参照
(2)本報告書6頁P参照
(3)本報告書6頁E参照
(4)本報告書6頁I参照
(5)喜谷美宣「原始・古代の神戸　金棒池1号墳」『新修神戸市史歴史編Ⅰ　自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989
(6)渡辺伸行「木棺直葬墳の終焉－明石川流域の古墳の調査から－」『神戸市史紀要　神戸の歴史第15号』神戸市市長総局　1986
(7)(6)に同じ
(8)田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1966・『須恵器大成』角川書店　1981
(9)帆立貝形古墳の被葬者について櫃本誠一氏は、古市・百舌鳥古墳群や各地の古墳に、甲冑や馬具など武具を主体とする副葬が行われている古墳がみられるものが認められることから、軍事的な役割を担った人達が採用した墳形であるとされている(「帆立貝形古墳について」『考古学雑誌69－3』日本考古学会　1983)。
　また、沼澤豊氏は各地に見られる4,5世紀代の帆立貝形古墳について、朝鮮半島における軍事的活動を契機に、ヤマト王権が各地の諸勢力を直接掌握して編成し、軍事行動に参加させることを政策とし、それに応じてはじめて王権と政治的関係を結ぶことになった地方中小豪族、または軍事以外の職業部の長が葬られた墓である可能性を推測されている(「帆立貝式古墳築造企画論　8．小方部墳の被葬者」『季刊考古学第87号』雄山閣　2004)。
(10)(6)に同じ、深江英憲他『表山遺跡・池ノ内群集墳』神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　兵庫県教育委員会　2000
(11)伊川左岸の丘陵を隔てた垂水区本多聞や神陵台付近にも当該時期の木棺直葬墳が存在したといわれるが、団地開発等で早くに消失し、詳細は不明である。
(12)前田佳久「新内古墳」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1989
(13)山本雅和「西盛南遺跡」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1994
(14)阿部敬生「福住遺跡」『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2005に掲載予定
(15)口野博史『押部遺跡第2次発掘調査概報』神戸市教育委員会　1991
(16)喜谷美宣「原始・古代の神戸　明石川流域の群集墳」『新修神戸市史歴史編Ⅰ自然・考古』新修神戸市史編集委員会　1989
(17)(16)におなじ
(18)本報告書6頁P参照
(19)喜谷美宣他『西神ニュータウン内の遺跡　中間報告Ⅰ』神戸市　1972
(20)本報告書6頁35参照
(21)明石川左岸中流域の平野町繁田・堅田、押部谷町養田付近では、古墳時代と思われる掘立柱建物も見つかっているが、詳細は不明である。
(22)本報告書6頁K参照
(23)本報告書6頁L参照
(24)(23)に同じ

(25)本報告書５頁23参照
(26)本報告書５頁30参照
(27)本報告書５頁24参照
(28)本報告書６頁Ｉ参照
(29)本報告書６頁Ｊ参照
(30)本報告書４頁15参照
(31)本報告書４頁４参照
(32)(33)(6)に同じ
(34)本報告書５頁26参照
(35)本報告書５頁27参照
(36)本報告書６頁Ａ参照
(37)本報告書６頁Ｆ参照
(38)本報告書６頁Ｇ参照
(39)本報告書６頁Ｃ参照
(40)本報告書６頁Ｈ参照
(41)本報告書４頁６参照
(42)本報告書４頁７参照
(43)本報告書５頁19参照
(44)本報告書４頁12参照
(45)本報告書４頁13参照
(46)和田晴吾「古墳築造の諸段階と政治的階層構成－五世紀代の首長制的体制に触れつつ－」荒木敏夫編『ヤマト王権と交流の諸相』名著出版　1994
(47)これらの前方後円墳に葬られた被葬者たちが、明石川の流域全部を掌握していたかについては疑問が残る。難しい問題ではあるが、どの辺りまでを勢力範囲としたかについては今後の課題としたい。
(48)吉田晶氏は、５世紀の地域社会では大首長と中小首長との対立が顕在化し、中小首長層は大首長より上位にある倭王との直接的な隷属関係を持つことによって、大首長からの自立を図ろうとし、倭王側も中小首長のこうした動向は、自らに直属する新たな勢力を獲得することになり、積極的に自らのもとに隷属させることを求めていったと説かれている（「終章倭王権と国家形成」『倭王権の時代』新日本新書490　1998)。
これに対して、白石太一郎氏は5世紀後半以降の地方と首長層の関係は、地方首長が直接ヤマトの大王と結びついていたのではなく、ヤマトの王権を構成する大伴氏、物部氏、阿部氏といった中央豪族と、それぞれその職掌関係と擬制的同族関係を媒介として強く結びついていたと想定されている（「第4章ヤマト政権の変質」『古墳とヤマト政権－古代国家はいかに形成されたか－』文春新書036　1999)。
また沼澤豊氏は、ヤマト王権が、各地の大豪族の支配下にない独立的な中小首長で、それまで王権との関係をもたなかったもの、あるいは大豪族の傍系氏族など相対的に独立性の高い中小首長を直接掌握して、武器、武具など支給して軍令に忠実な戦闘力に仕立てる政策が採用されたとされ、これらの中小首長は王権の命によって中央の軍事的伴造氏族の傘下に収まったとされている。また、軍事に限らず各種の職掌を持って奉仕する職業部、貢納型の部も同様であるとされる［(9) 沼澤氏の論文と同じ］。ただし５世紀の段階でこれらの人々が、部民としてどの程度まで編成がなされていたかについては、さらに検討を要するものと思われる。
熊谷公男氏は、５世紀代の倭王と地方豪族の関係は、倭王権による渡来人と先進文明の独占的掌握を前提としながらも、中央と地方のヒトとモノの直接的でかつ相互的な行き来に支えられた「互酬制」的関係によって支えられていたとし、ヒトとモノの流れが断ち切られれば、相互の関係は容易に解消されてしまうような、不安定なものであったとされる（「第２章「治天下大王」の登場」『大王から天皇へ』日本の歴史第３巻　講談社　2001)。
(49) 今津啓子氏は西日本各地から出土した朝鮮系軟質土器について調査し、神戸市西区出合遺跡から出土したそれらの器種の豊富さからみて、渡来人の居住した可能性が高い集落というランクを付されている（「渡来人の土器－朝鮮系軟質土器を中心にして－」荒木敏夫編『ヤマト王権と交流の諸相』名著出版　1994)。
(50) 岸本道昭氏は、河内平野の小古墳の被葬者を、河内平野において諸生産を担う各小集団の首長であったが、彼らはさらに大きな地域的まとまりの中にあって、その地域首長に連なることによって、より上位の首長（大王）へ従属していたとされた。また、生産を担う各小集団は氏族共同体と規定し、小古墳はその首長の墓であると想定された（「第２編　河内平野の埋没小古墳研究予察」『山賀（その５・６）－河内平野における初期農耕遺跡の調査－』大阪府教育委員会　財団法人大阪文化財センター　1986)
これに対して、奥和之氏は、岸本氏が前掲論文を発表された以降の河内平野とその周辺の調査成果を踏まえ、小型低方墳や小型低円墳の被葬者たちのほとんどは氏族共同体の構成員である世帯共同体（有力家父長層）と考えられている（『みかん山古墳群』 大阪府埋蔵文化財調査報告1997-2　大阪府教育委員会　1998)。
(51) 安田滋他『住吉宮町遺跡　第24次・第32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2001
(52) 住吉宮町古墳群に前方後円墳、帆立貝形古墳、方墳、箱式石棺墓、土器棺墓という構成がみられるのは、重層的な階層が想定されるものであり、和田晴吾氏の説かれるピラミッド型の階層構成に一致する［(46) の論文と同じ］。
(53) 長山雅一「長原古墳群の性格について」『古代史論集上』 直木孝次郎先生古希記念会　塙書房　1988
(54) (53) に同じ

写 真 図 版

調査地遠景（北上空から）

調査地遠景（南東上空から）

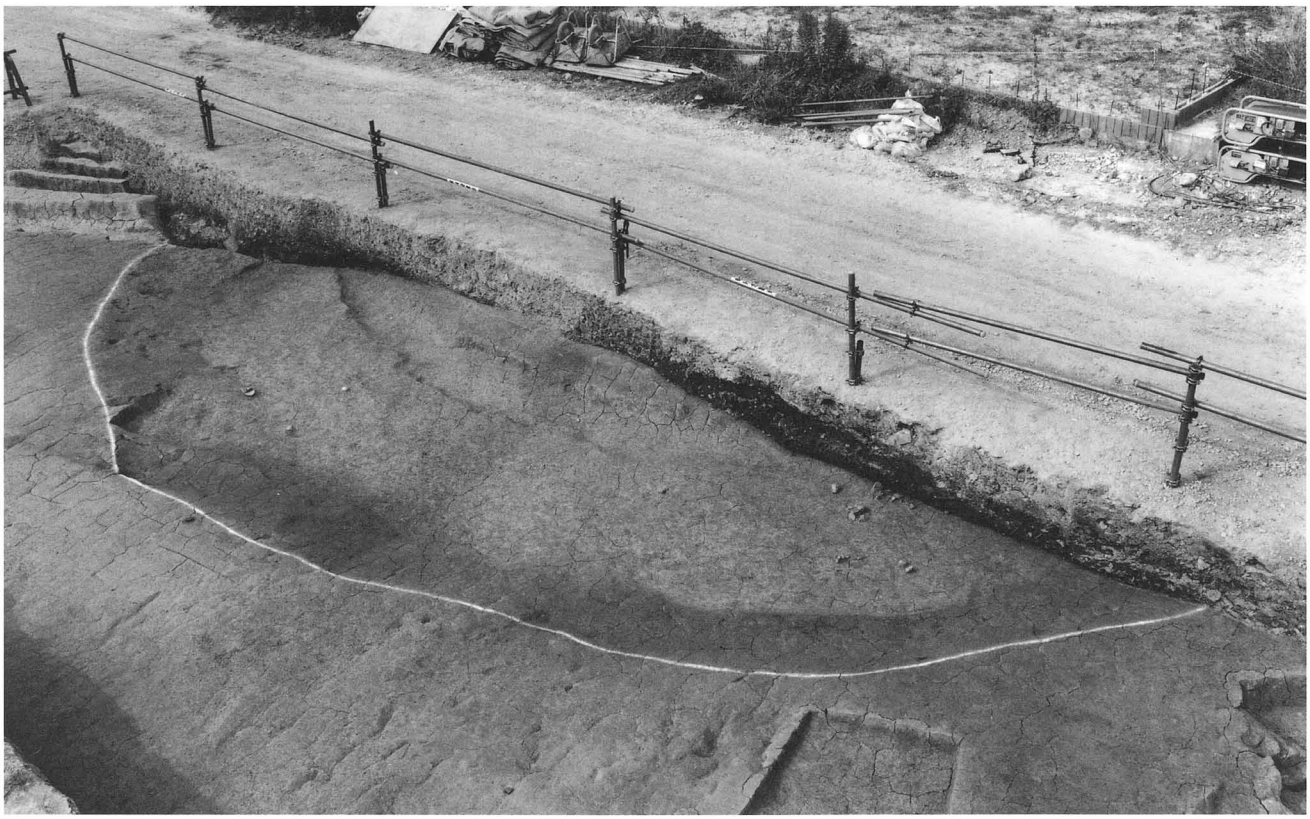


写真図版２
水谷遺跡第10次調査

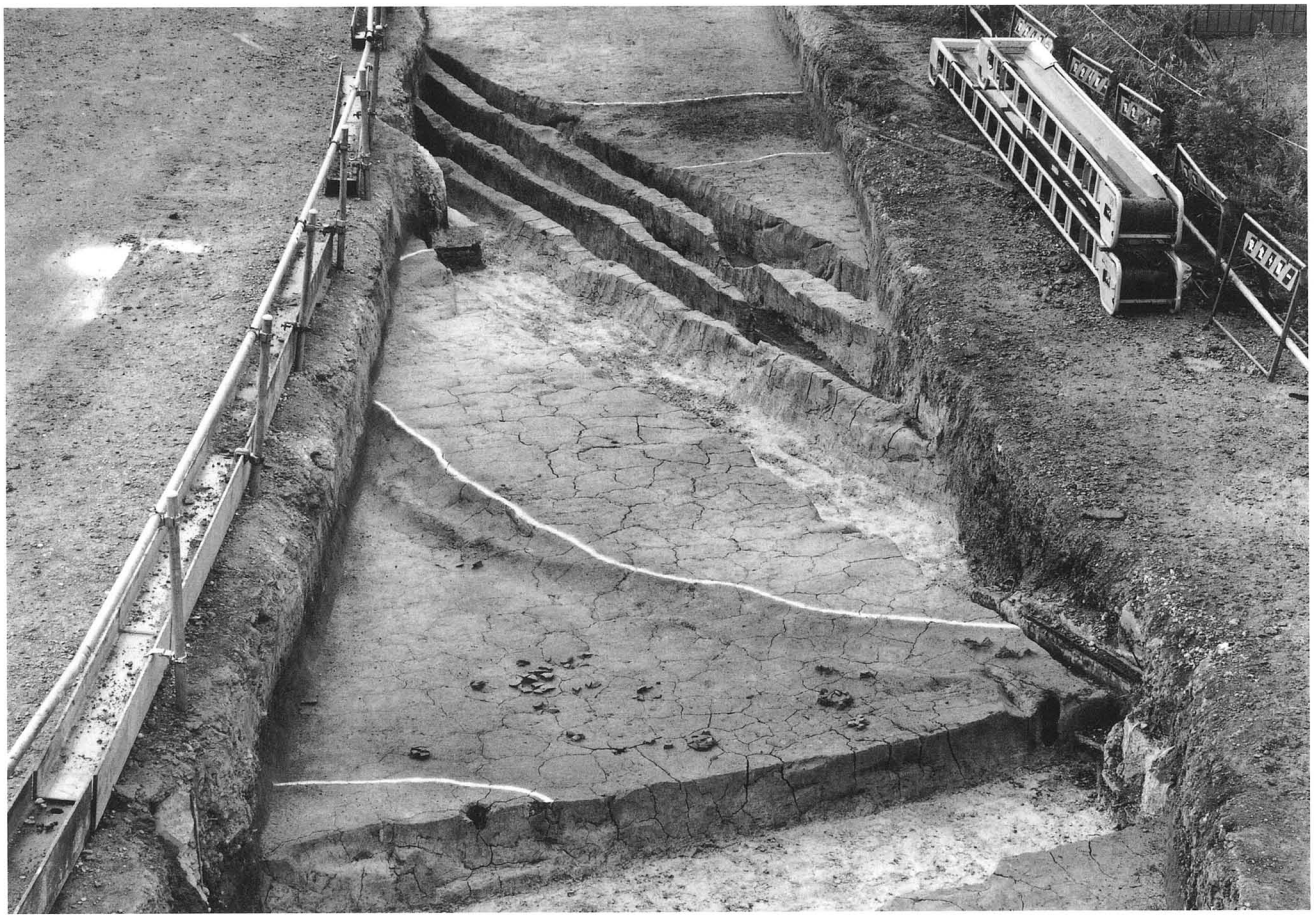
Ａ区　東半部全景（西から）

Ｃ区　３、４号墳周溝完掘状況（西から）

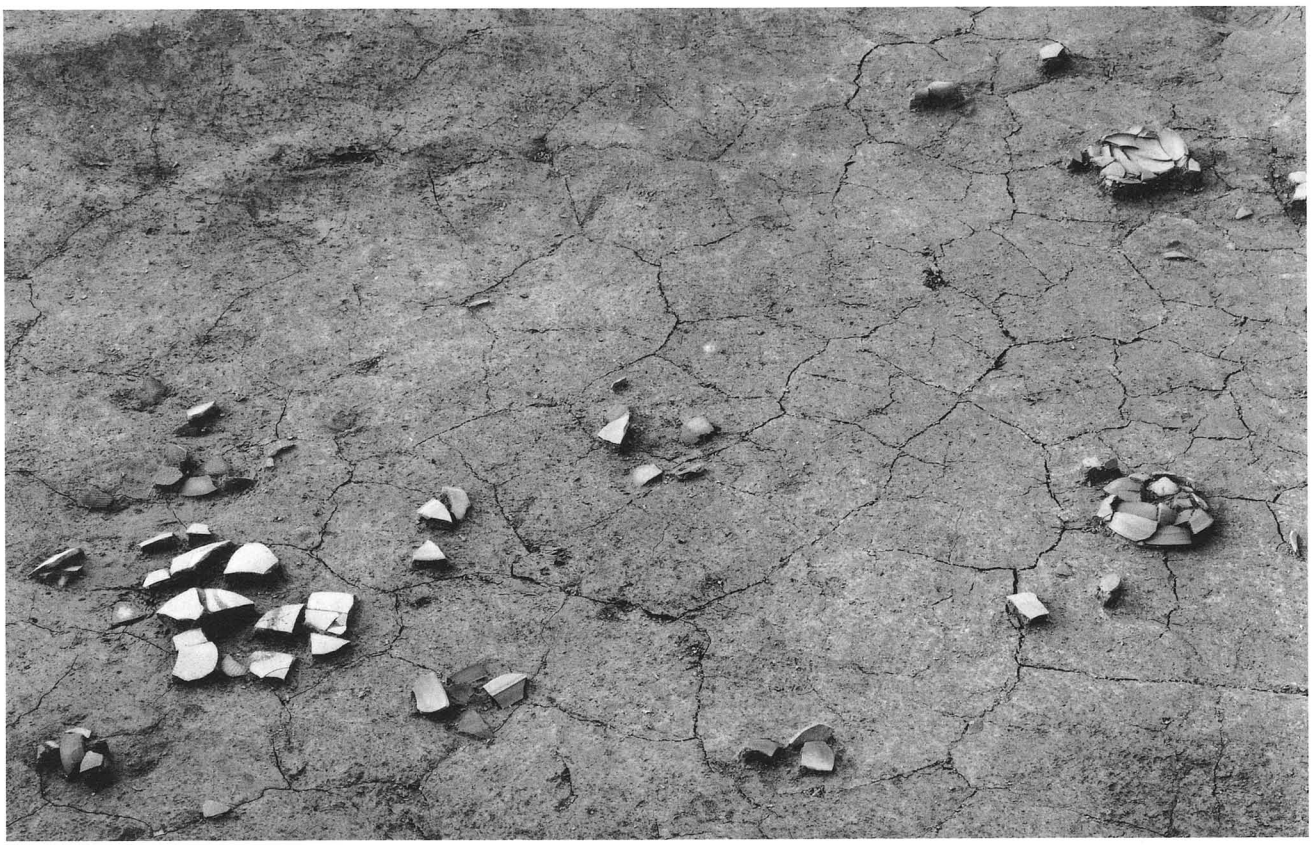
C区　全景（東から）



C区　３号墳周溝完掘状況（南東から）



A区　3号墳周溝内土器出土状況（東から）



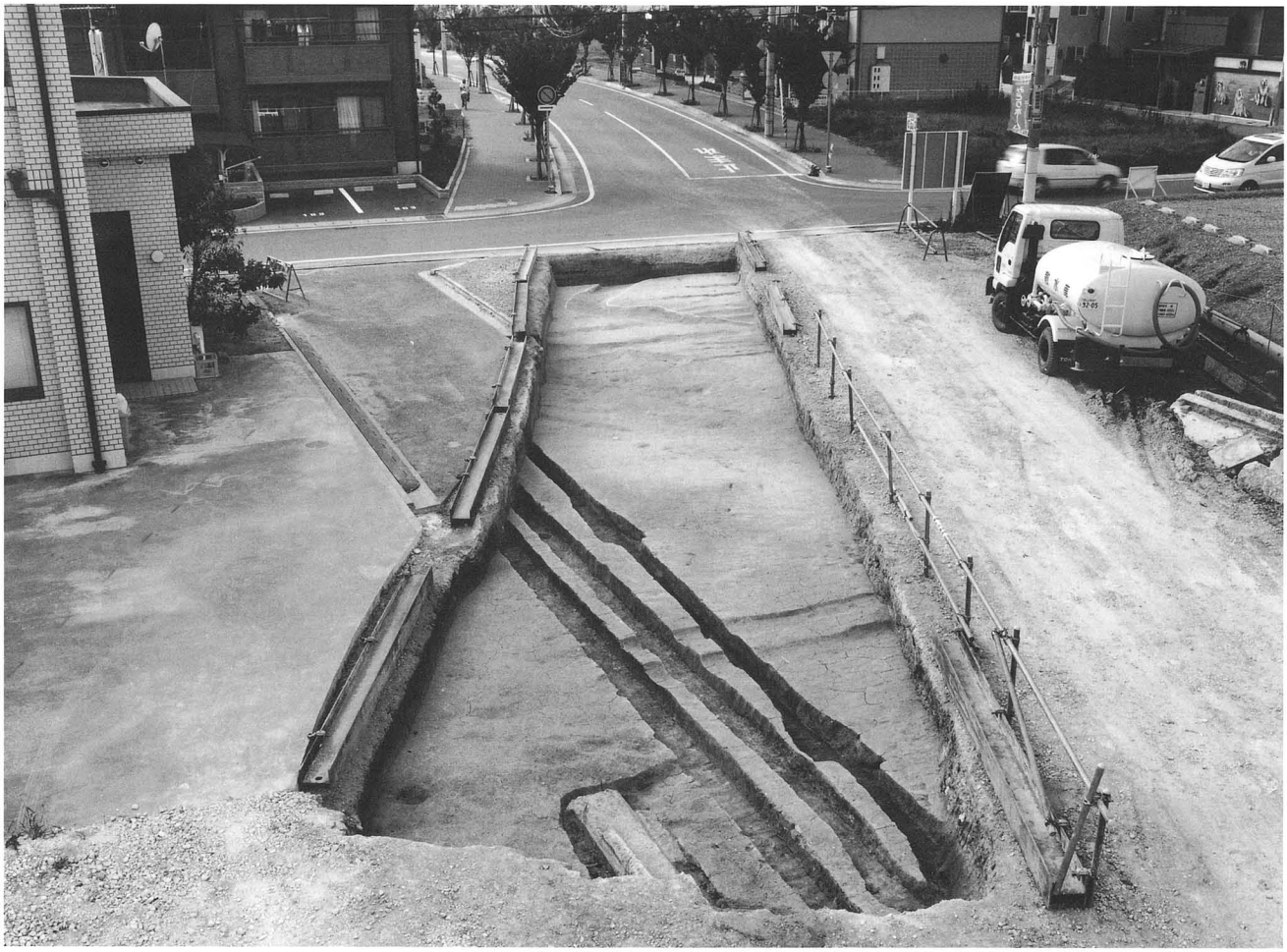
同上　細部（南東から）

Ｃ区　３、４号墳周溝内土器出土状況（東から）

Ｃ区　４号墳周溝内土器出土状況細部（北から）

A区　4号墳周溝完掘状況（東から）

A区　4号墳周溝付近粘土塊・埴輪出土状況（東から）



Ｂ区　全景（東から）

Ｂ区　５号墳周溝完掘状況（東から）

1

2

3

4

7

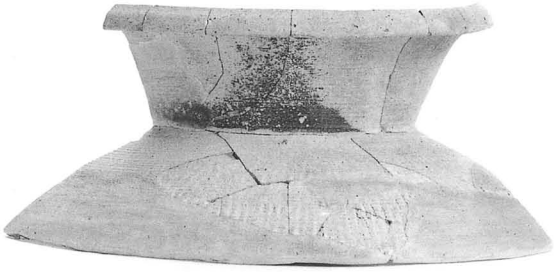
8

10

11

3号墳周溝出土土器

12



13

14

3 号墳周溝出土土器

5

3 号墳周溝出土土器

17

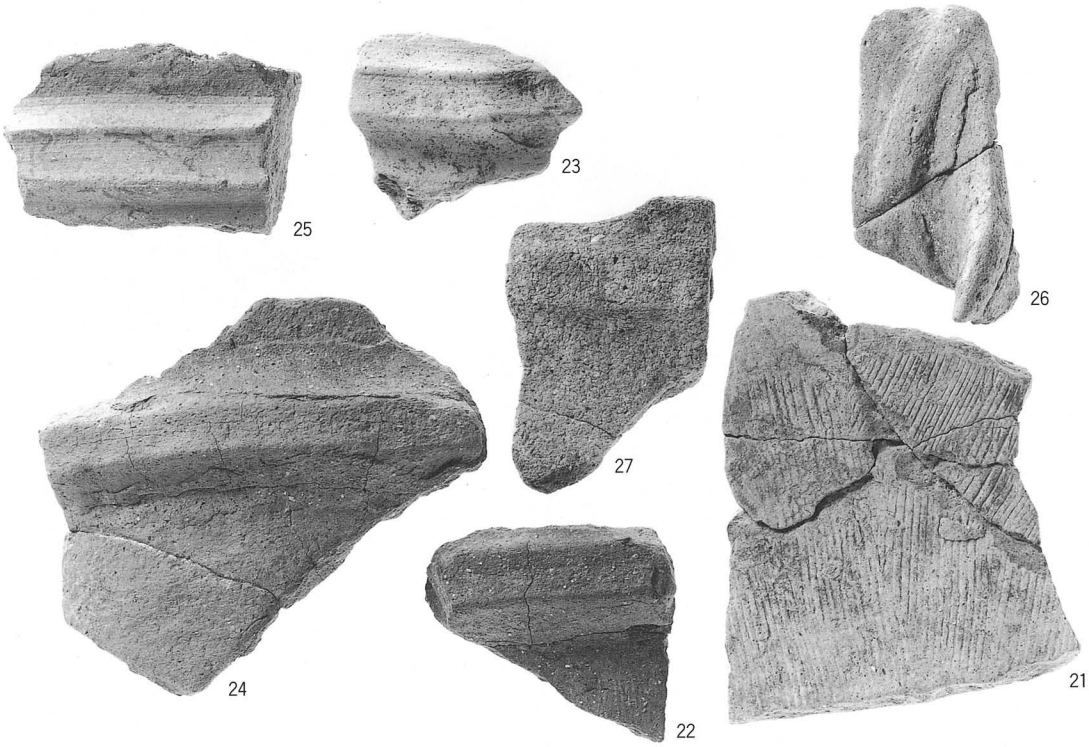
19

4 号墳上層（黄灰色粘質土）出土土器

15

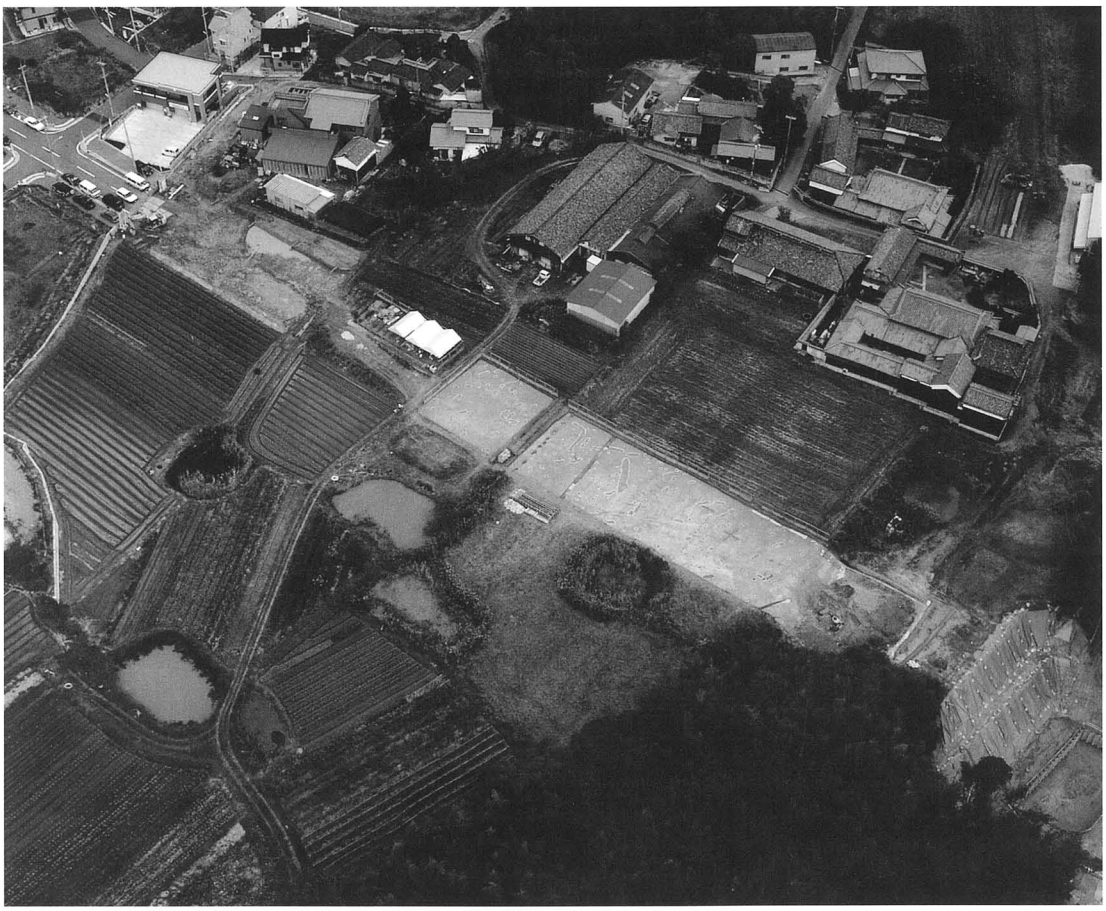
4 号墳周溝出土土器

4号墳上層（黄灰色粘質土）出土石製紡錘車



4、5号墳周溝、黄灰色粘質土出土埴輪（21～24、26：4号墳周溝出土
25：黄灰色粘質土出土
27：5号墳周溝出土）

調査区全景（空撮・北から）

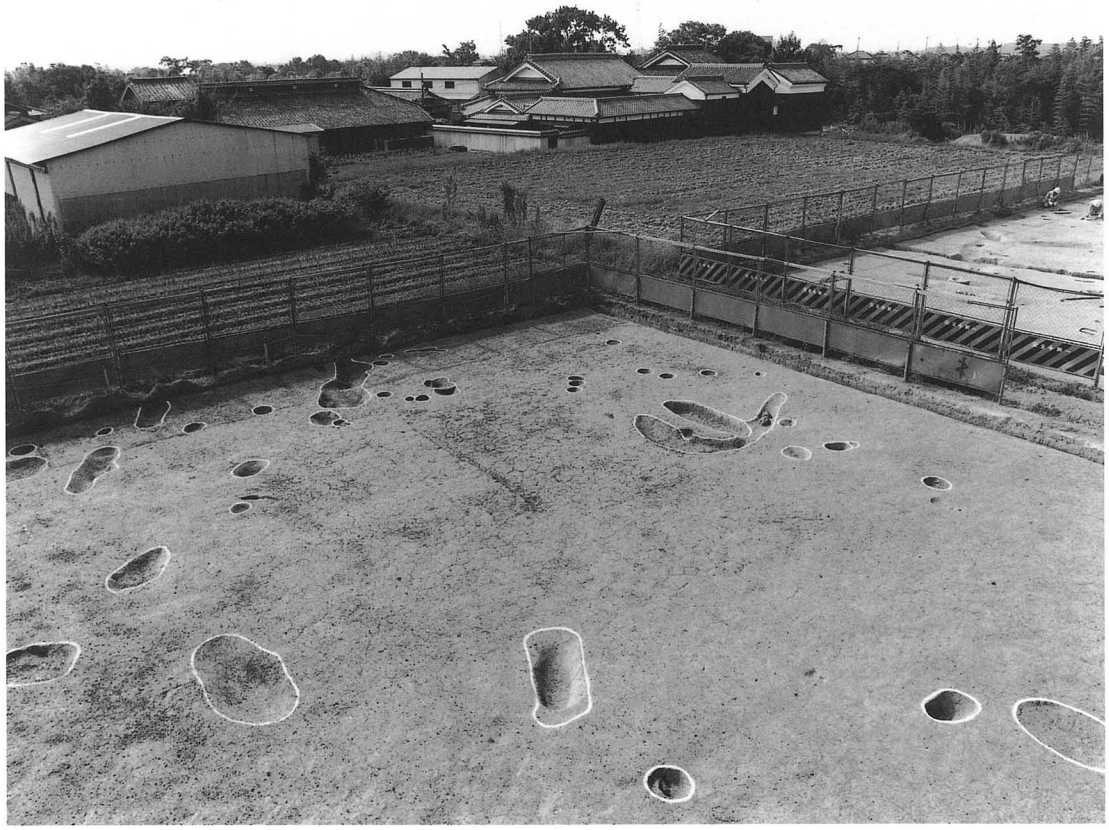


調査区全景（空撮・南西から）

Ａ区　南半全景（北東から）

Ａ区　中央全景（北東から）

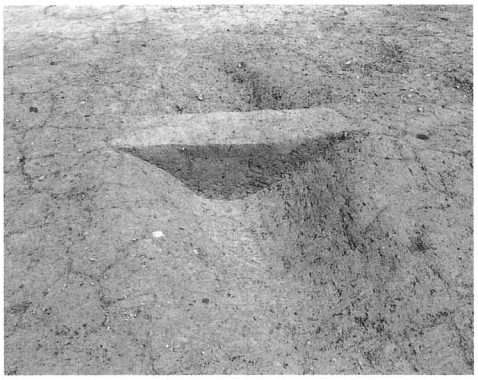
Ａ区　北半全景（南東から）



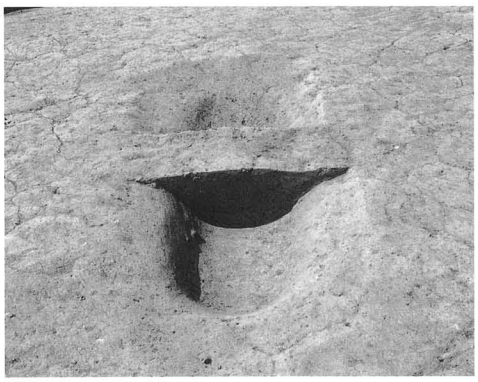
Ｂ区　全景（東から）

ＳＸ03・04全景（南東から）

ＳＸ05全景（東から）



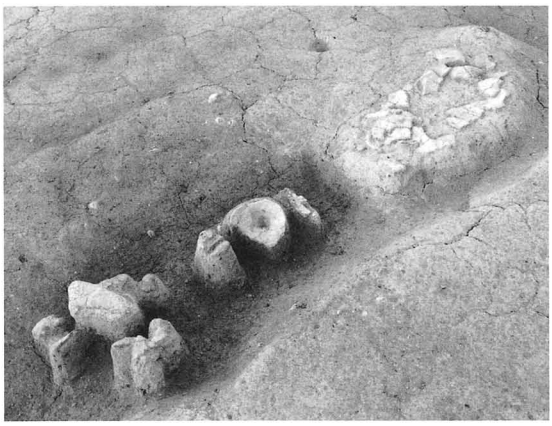
ＳＸ01（東から）



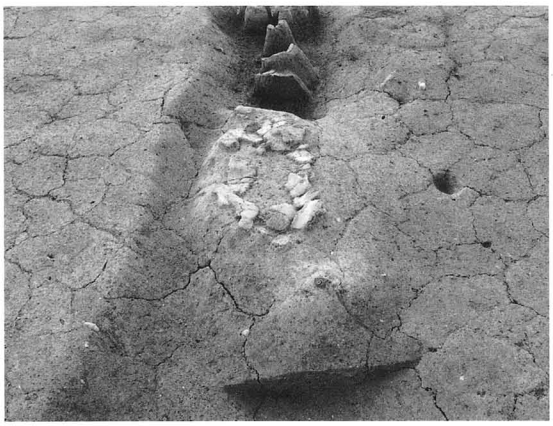
ＳＸ02（東から）

方形区画遺構　ＳＤ01～04　全景（北から）

ＳＤ01　全景（東から）

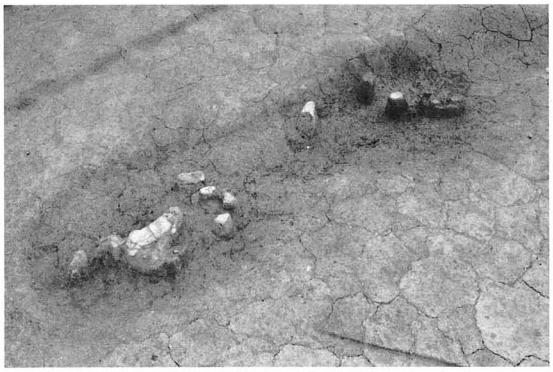


ＳＤ01　西辺遺物出土状況（南東から）



ＳＤ01　北辺遺物出土状況近景（東から）

ＳＤ01　遺物出土状況（東から）

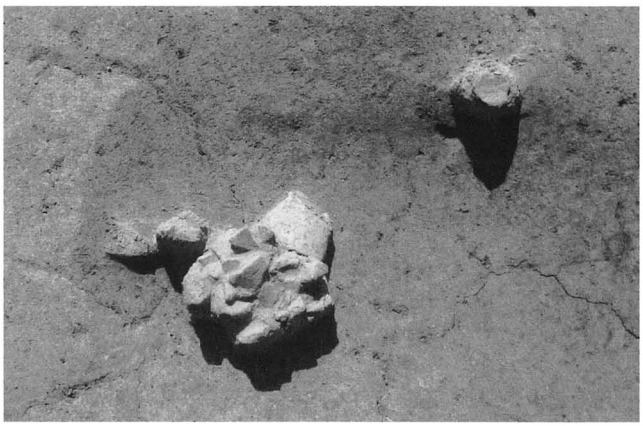


ＳＤ01　北辺遺物出土状況（南から）

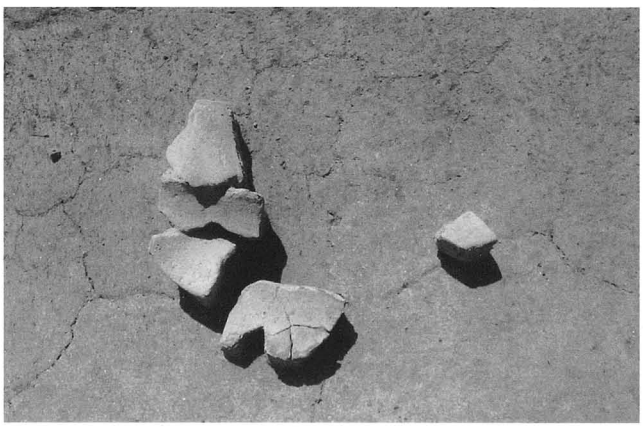
ＳＤ01　西辺遺物出土状況近景（南東から）

ＳＤ03　全景（南東から）

ＳＤ03　土層断面（南東から）



ＳＤ03　東端遺物出土状況（東から）

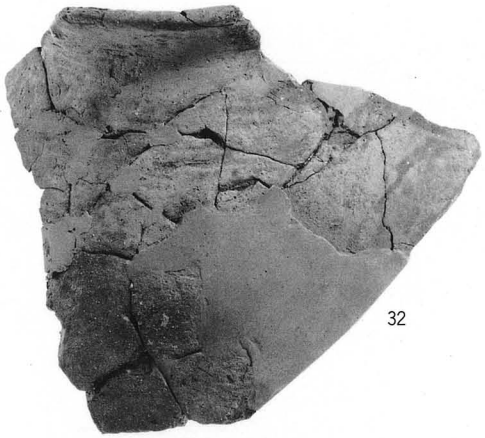


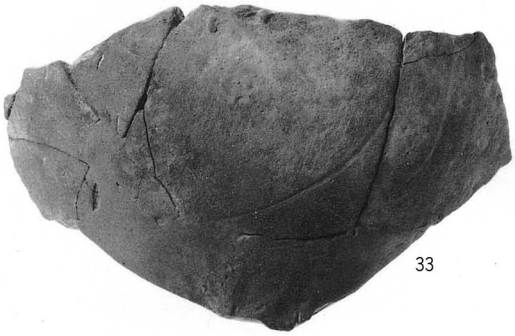
ＳＤ03　西端遺物出土状況（南東から）

ＳＤ03　出土遺物

ＳＤ04　全景（北東から）

ＳＤ04　土層断面（北東から）





ＳＤ04　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みたにいせきだいじゅうじちょうさ・うまかけはらいせきだいいちじちょうさ
書名	水谷遺跡第10次調査・馬掛原遺跡第１次調査
副書名	都市計画道路出合新方線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	谷　正俊(編)・藤井太郎
編者機関	神戸市教育委員会
所在地	〒650-8570　神戸市中央区加納町６丁目５番１号　TEL078－322－6480
発行年月日	西暦2005年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
水谷遺跡(みたにいせき)	兵庫県神戸市(ひょうごけんこうべし)西区水谷１丁目(にしくみたにちょうめ)	28111		34度40分31秒	135度0分04秒	20030829～20031017	550㎡	都市計画道路出合新方線建設工事
馬掛原遺跡(うまかけはらいせき)	兵庫県神戸市(ひょうごけんこうべし)西区高津橋(にしくこうづばし)	28111		34度40分26秒	135度0分14秒	20030908～20031020	1000㎡	都市計画道路出合新方線建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水谷遺跡	古墳	古墳時代	古墳の周溝	土師器・須恵器	
馬掛原遺跡	区画墓	弥生時代	溝・ピット・土坑	弥生土器	

水谷遺跡第10次調査・馬掛原遺跡第１次調査

都市計画道路出合新方線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

発行　神戸市教育委員会文化財課
〒650－8570　神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL078－322－6480

印刷　デジタルグラフィック株式会社
〒650－0043　神戸市中央区弁天町１丁目１番
TEL078－371－7000

神戸市広報印刷物登録・平成16年度第260号(広報印刷物規格Ａ-6類)

本書は、再生紙を使用しています。